

42542

教科書文庫

4
810
44-1930
20000 90668

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

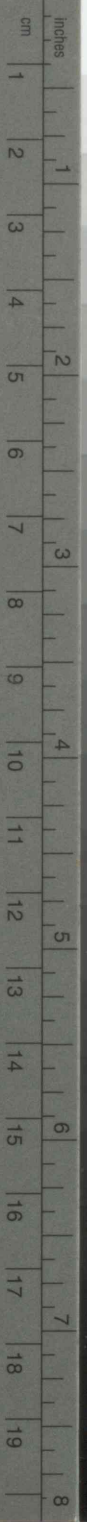


© Kodak, 2007 TM: Kodak

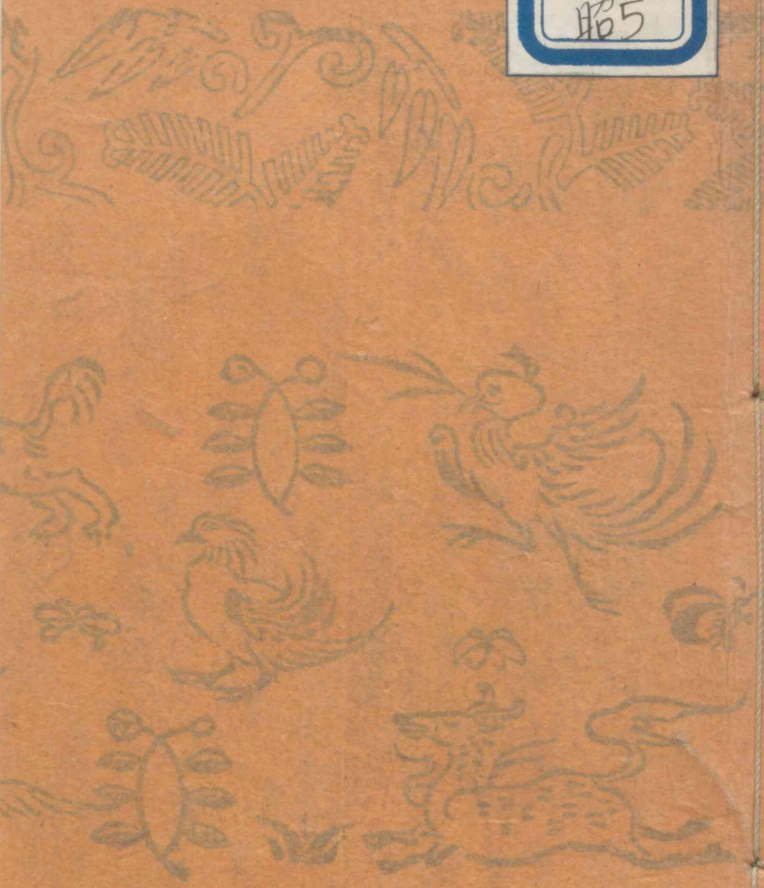
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
昭5



中等國語讀本
新修二版
卷八



文部省檢定

昭和八年七月五日
實用國語科

昭和五年十月九日
中學國語科

資料室

4a
8/10
AB5

中等國語讀本



編者

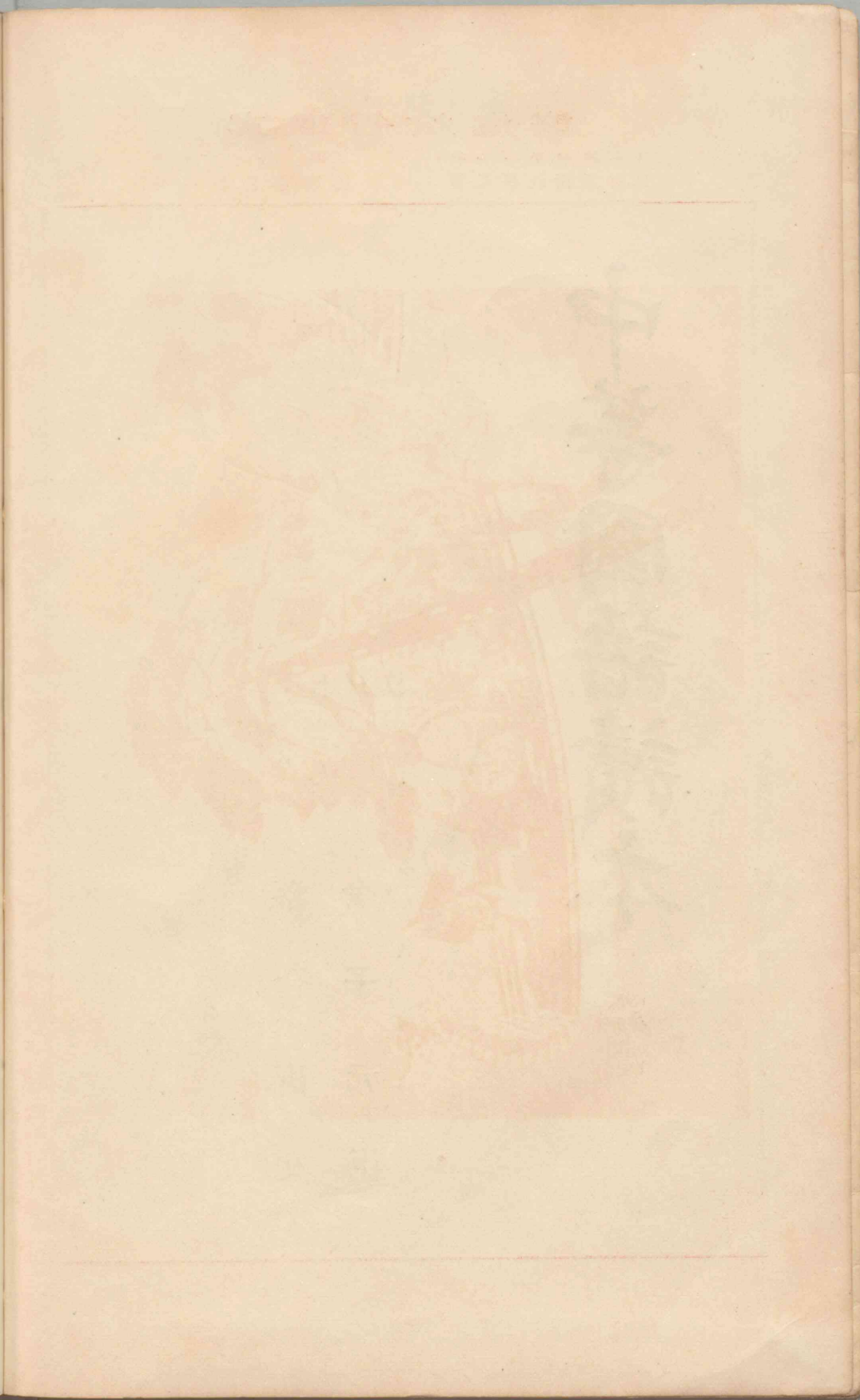
金落
子合
元直
臣文

新修二版



雪の花落 〇二

(筆丘映岡松) 船の首 錦 頭 龍



卷八目次

一 活動の法悦	和辻哲郎	一
二 方丈の記	嶋長明	六
一、ゆく川		六
二、日野山の閑居		七
三 寄情託興	瀧精一	一四
四 筆のまにまに	本居宣長	一九
一、わがをしへ子に		一九
二、ひとむきに片寄ること		一九
三、述懐		二一

五 自然を喜ぶ……………芳賀矢一……………二四

六 山路……………夏目漱石……………三一

七 雲雀より(俳句)……………(徒然草)……………四四

八 人生……………(徒然草)……………四七

一、心……………四七

二、頼むべからず……………四九

三、主ある家……………五〇

九 丹波少將……………(平家物語)……………五三

一〇 てる月なみ(和歌)……………五六

一一 水無瀬殿……………(増鏡)……………六三

一二 死と永生……………高山樗牛……………七一

一三 討入の光景を報ず……………榎本其角……………七六

一四 世界の借家大将……………井原西鶴……………七九

一五 うへ野山(狂歌)……………八五

一六 山庵雜記……………北村透谷……………八八

一七 倫敦塔……………夏目漱石……………九一

一八 眞の學人……………得能文……………一〇三

一九 長柄堤の訣別……………坪内逍遙……………一〇八

二〇 落花の雪……………(太平記)……………一一〇

二一 夢應の鯉魚……………上田秋成……………一二五

二二 我等の祖先の生活……………相馬御風……………一三三

二三 世界の四聖 その一……………高山樗牛……………一三八

二四 世界の四聖 その二……………同

(終) 一四七

(附録) 武官服装圖

國文學史(近古)

近古文學一覽

中等國語讀本 新修二版 卷八

一 活動の法悦

宗致の悦び

人生は戦である。そして戦の大小深淺が人間の價値を左右する。私は、ある冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が群をなして沖から歸つて來る。そして鳩が地へ舞ひおりのやうに、徐徐に一艘づつ帆をおろして、半町程の沖合に屯した。岸との間には大きい白い磯波が巻き返してゐる。何時の間にか、老人や女や子供たちが、岸邊に群り立つた。やがて體格の立派な若者等の乗つた舟が岸へ突き進んで來る。磯波は烈しく押し戻す。磯から綱が投げられる。若者が波の間へ飛び込んで行く。舟は木の葉の

Rhythm
リズム
音律。

やうに揉まれてゐる。綱が舟に結びつけられる。若者は舟べりへ肩をあてる。陸からは綱を引くものが、諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足を揃へ、聲を合はせて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘上がると共に、舟にゐた若者たちは、直に綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗り掛けると、丁度荒れ廻る鹿の角に投げ掛けるやうに、若者は舟へ綱を投げ掛ける。そして他の若者たちは躍りかかつて、舟べりへ肩をあてて一氣に舟を引き上げる。かうして次から次へと、數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人數はますます殖える。舟はますます面白さうに上つて来る。老人や女や子供たちは、綱につかまつて快活に跳ねてゐる。誰が命令するといふのでもないのに、一團の人人は、一神々の命令とて有機體のやうに協力と分業とで完全に仕事を實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の力と戦ふ人間の姿、集中と純一集中と純一とが最も具體的な形に現はれてゐる力の充實、透間のな活動。一人の少年が兩手を高く舉げて、波の中に躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切れに追ひ縋る。やがて板切れを抱いて水を跳ね飛ばしながら、駛り上つて来る。生命が踊り跳ねてゐる。生命が自然と戦ひ、それを征服してゐる。

私はそこに現はれた集中と純一と全存在的な活動とを見て、暫し恍惚とした。この氣持の好さは、我我が凡べての活動に追求して居る所の一種の法悦であつた。我々の内にも亦生命の焰はかく燃え上らなくてはいけない。まことにそれは生命本來の姿であり、又生命本來の歡喜である。

かうして漁夫の群の活動を眺めてゐる中に、私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じ出した。私は漁夫の群に投じて共に働くか、それ

トルストイ

ロシアの文豪

Tolstoy. 豪(西曆一八二八年—一九一〇年)

考へる人

フランスの彫刻家、ロダンの傑作。

でなければ、傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を極めなければならなくなつた。そして私の頭には、百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐してゐる「考へる人」の姿とが、相竝んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして左の脇を右の膝に突いて、顎を手の甲に載せて、そして考に沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた。漁夫の群に貴い集中と純一とを認めたのは、私の心に過ぎなかつたではないか。彼等はやがて濱から家へ歸る。そこにはもう貴さはない。彼等は波と戦つて勇ましく打ち克つた。しかし敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼等はどう立派な戦士ではない。彼等の活動は眞生の面影を暗示する。しかし、それは彼等自身の全生活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

和辻哲郎
兵庫縣の人。文學者。京都帝國大學助教授。

私は複雑な深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐるみじめな醜さを心に浮べた。そこにある苦しい戦は、裸になつて冬の海に飛び込むことでは解決されさうにもなかつた。私はただ自分の力で自分の内生に、あの集中と純一とを獲得する外はない。その爲には、私はあらゆる方面に終局まで戦はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活の慘めさは、目下自分の力では如何ともしがたい。

私は一つのことを悟り得た。迷と屈託とに遲滯してゐるの故を以て、直にその人の人格を卑しめてはいけぬ。單に態度の純一なるを以て、直にその人の人格を過大視してはいけぬ。態度の美しさの外に、なほ一つの戦の深さによつて人を見る視點があるからである。(和辻哲郎「偶像再觀」)

二 方丈の記

一、ゆく川

逝く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて久しくとどまることなし。世の中にある人と住處と亦かくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ墓を争へる、たかき卑しき人の住居は、代代を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕べに生まるるならひ、只水の泡にぞ似たりける。知らず生まれ死ぬる人、いづ方より來たりて何方へか去る。又知らず、假のやどり、誰がために心を惱まし、何によりてか目を悦ば

しむる。その主人とすみかと無常をあらそひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露おちて花残り。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。(方丈記)

二、日野山の閑居

ここに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住處になすらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齡は年年にかたぶき、住處は折折にせまし。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。處を思ひ定めざるが故に、地を占め



いはば旅人云云
慶滋保胤の池亭記に、「亦猶、行人之造、旅宿、老蠶之成、中獨繭、矣、其住、幾時乎。」

白毫相

日野山
京都府宇治郡
關伽棚



普賢
菩薩の名。釋迦
佛の右の脇士。
往生要集
六卷。源信僧都
の著。

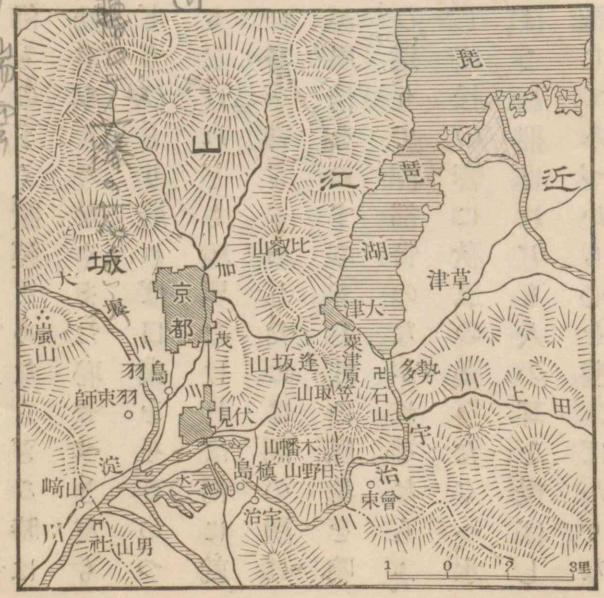
て造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩がある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用途いらす。いま日野山の奥に迹をかくして、後、南に假の目がくしをさし出だして、竹のすのこを敷き、その西に關伽棚を作り、うちには、西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間のひかりとす。かの帳の扉に普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上にもちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏、琵琶、おのおの一張を立つ。いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほども敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。ひがしの垣に窓を開けて、ここに文机を出だせり。枕のかたに炭櫃あり。これを柴折りく

みやまはの敷き
とやまふ
ホトトギス
死虫の
ミナトコナサ

時鳥
子規
郭公
雲公
杜鵑
杜宇
死虫の

鶯
柴鶴
さき
あひ
草
草

かくの如し。その處のさまをいはば、南にかけひあり。岩をたたみて水を溜めたり。林近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹をうづめぬ。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしも、あらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして、西の方にほふ。夏は子規を聞く。かたらふ毎に死出の山路をちぎる。秋は、蝸の聲耳に満て



二 方丈の記

みやまはの敷き
とやまふ
ホトトギス
死虫の
ミナトコナサ
鶯
柴鶴
さき
あひ
草
草

迹のしら波
拾遺集、沙彌滿誓一世の中を何にたとへむ朝ぼらけこきゆく船のあさのしら波
岡の屋
京都府紀伊郡。沙彌滿誓。元正天皇の時の人。薄陽の江
白樂天の琵琶行に「薄陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、云云」。源都督
桂大納言源經信。琵琶の能手。(一六七六年—一七五七年)
秋風、流泉
ともに琵琶の曲名。

り空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむつもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時はみづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何に就けてか破らむ。もし迹のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕べには、薄陽の江をおもひ遣りて、源都督のながれをならぶ。若しあまりの興ある時は、しばしば松の響に、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめむともあらず。獨しらべ獨詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはちこの山守が居るところなり。

木幡山、伏見、鳥羽
京都府紀伊郡。羽束師
同乙訓郡。
勝地は云云
白氏文集に、「勝地本来無定主、大都山屬愛山人」。
炭山、笠取
京都府宇治郡。岩間
滋賀縣滋賀郡正法寺の觀音。
石山
同郡石山寺の觀音。
猿丸大夫の墓
同縣栗太郡田上村大字竹東あり。

り。かしこに小童あり。時時來たりてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊びあり。くかれは十六歳、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれおなじ。あるひは茅花を抜き、岩梨を採る。また零餘子をもり、芹を摘む。あるひは裾わの田居において、落穂を拾ひて穂組を作る。若し日うらかなれば、嶺に攀ぢのぼりてはるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。歩みわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、あるひは岩間にまうで、あるひは石山を拜む。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには、折につけつつ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に獻り、かつは家苞にすも、し夜しづかなれば、窓の月に、古人をしのび、猿の聲に、袖をうるほす。草むらの螢は遠

眞木の島
京都府宇治郡。
山鳥のほろほ
ろと

玉葉集、行基、
「山鳥のほろほ
ろとなく聲きけ
ば父かと思ふ
母かと思ふ」。

峰のかせぎの
云云

西行の歌に「山
深みなるかせ
ぎのけちかき
世に遠ざかる程
ぞ知らるる」。

おそろしき山
云云

西行の歌に、
「山深みけちか
き鳥の聲はせて
物おそろしきふ
くろふの聲」。

く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きても父か母かとうたがひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。ある

山中の景氣をりにつけて盡くることなし。いはむや深く思ひ深く
知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。
大かたこのところに住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、
今すでに五とせを経たり。假の庵もやや古屋となりて、軒には朽葉

ひは埋火を掻き
おこして老の寢
覺の友とす。おそ
ろしき山ならね
ど、鼻の聲をあは
れむにつけても、

ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この
山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ま
して數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびたびの炎
上に亡びたる家またいくばくぞ。ただ假の庵のみのどけくして恐
なし。(方丈記)

能因入道伊豫の國に下りけるに、夏の初め日照りて民の歎淺からざ
りければ、試に三島に奉るべき由國司頻に勧めければ、

天の川なは代水にせさくだせ

あまくだります神ならば神

と詠みて申し上げたるに、俄に曇り渡りて大いなる雨降りて枯れた
る稲葉おしなべて緑に反りにけり。能因は至れるすき者なり。

都をば霞とともに立ちしかど

秋かぜぞ吹く白川の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出ださんは無念と思ひて、
人にも知られず、久しく籠りゐて色を黒く日にあぶりなして後、みち
のくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。(千訓抄)

三 寄情託興

自然物に對して、その形相、色彩及びその他形而下の關係を以てこれを觀る以外に、觀者の心に於いて、その物に就きて種種なる聯想を伴はしむる時は、その觀照は甚だ含蓄深きものとなるべし。邦人の自然に對してその樂しみを得るや、眞にその聯想を喜ぶもの多く、時としてはその形色の美をも問はざらんとすることなきにあらず。

彼の三十一字の短歌を以て能く物の深遠なる趣をいひ現はすといふことも、畢竟そが人をして所要の聯想を起さしむるに恰好なることをいひあはせて、歌となすが故なるべし。我が邦古來の美術に於いても、亦それと同様なる事あり。形相は極めて單簡なれども、趣味含蓄の大なるもの往往にしてこれあるを見る。又近世に

終映 手改式は主観と主観とを区別してその形而下の關係を以て

直接の聯想以外にその物に就きて種種なる聯想を伴はしむる時は、その觀照は甚だ含蓄深きものとなるべし。邦人の自然に對してその樂しみを得るや、眞にその聯想を喜ぶもの多く、時としてはその形色の美をも問はざらんとすることなきにあらず。

至りては、我が文學に於いて、短歌の外に更に十七字の俳句行はれ、それに隨ひて、美術上にもまた俳句に似たる趣味を以て、自然物を輕妙に且味ひ深く寫せるもの起れり。

されば彼の、日本の美術が自然に關するもの多きが故に客觀的なりといふ者は、これ未だ日本人の文學、美術に於ける自然趣味の性質を十分に理解せざるもの言のみ。若し美術を論ずるに主としてその題目の品類より分ちていふ時は、日本の美術は或は客觀的なりといふも可ならん。されど若しこれを他の見解、即ち美術を作る側より見れば、恰も前記の反對に、西歐の美術の方客觀的にして、日本の美術の方むしろ主觀的なりともいひ得らるべし。その故如何にとならば、前記の如く、主として人間を寫してこれを主觀的なりといふは、元來人間には精神の實存するにより、これを寫す上に於いても主觀的なりといふものなるべきも、若しこれを技術家

の美術を作るうへより見んか、人間の肉體も、またそれに内存する精神も、その対象としては俱に客觀的なるものならずや。さばあれ、人間以外の自然物には内存の精神なしとしても、これを再現するに至りては、その対象たる實物に精神なき代りに、これを表現する上に於いて、作者が自身の空想を働かしめ、特にこれを精神的に意味あるものとして現はすこと能はざるにあらず。而して眞に美術の優秀なるものは、必ずかくあらざるべからざるなり。工藝的美術品の極めて單簡なるものに於いては、自然の形色を標示して事足りぬべき場合もあらんが、それすら少し高尚なるものに至れば、單に自然の形色を表はしたるのみにては十分ならず、必ずやこれを想化することあらん。況や工藝的美術品以上の純美術に至りては、いふまでもなき所なり。而して日本の美術に於いては、人間以外の自然物を対象として、その客觀存在に於いては精神な

きものも、特に空想を用ゐてこれを想化すること甚だ巧なり。這般の想化は、支那人の語を藉りていはば、これ所謂寄情託興なり。

寄情託興は擬人法とは異なり、これは自然を自然の如くに寫して、その著想乃至技巧上の工夫によりて、現に表はるる事物以外に多くの聯想を喚び起さしむる如くすることなり。この十分に行はれたるものは、假令自然物をのみ寫したりとするも、なほ主觀的なりといひ得べし。蓋し日本の美術に於いては、作者の主觀を働かしむる結果として、これを觀る者の方にも、亦おのづから主觀を生ぜしむることあるべし。又ある場合に於いては、作者は唯單簡なる暗示を與ふるに止まり、觀者に於いてみづから興趣を引き出ださざるを得ざることなきにあらず。かかる場合に於いては、作者よりも觀者の方に却つて多くの負擔を生ずべし。その程度如何は即ち作家の意を用ゐるべき所なり。これを要するに、日本人は深く自然を

瀧精一

文學博士。東京帝國大學文學部長。東京の人。美術評論家として名高し。

愛する性質をもてる結果として、勢ひ自然物を寫すもの多きは、これその美術に於ける著明なる特色なり。またその題目の如何に係はらず、恰もその自然を寫す場合に必要なるが如く、一般の著想に於いても主觀的又は空想的分子を混ふるもの多きこと、及び建築の如く自然の模倣を離るる性質のものに於いても、自然と相交渉して空想的の設計をなすもの多きことは、併せてまた日本の美術に於ける重大の事項ならずんばならず。それをしも深く思はずして、日本の美術は自然趣味と大いなる關係あるが故に、概して客觀的なり。或は寫實的なりなどいふものあらば、これ眞に一を知りて二を知らざる近眼者流の説なりと謂ふべし。(瀧精一)

子曰、繪事後素。(論語)

味、摩詰之詩、詩中有畫、觀、摩詰之畫、畫中有詩。(蘇東坡)

畫は沈黙せる詩にして、詩は發言せる畫なり。(サイモニテス)

四 筆のまにまに

一 わがをしへ子に

吾に従ひて物學ばむともがらも、わが後に又よき考の出できた
らむには、かならずわが説にな泥みそ。わがあしき故をいひて良き
考をひろめよ。總べておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれ
ば、かにもかくにも道を明かにせむぞ吾を用ゐるにはありける。道
を思はで、徒に吾を尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

(本居宣長—玉勝間)

二、ひとむきに片寄ること

世の物しり人の、人の説きごとのあしきを咎めず、一むきに片寄
らず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くは
おのが思ひ取りたる趣をまげて、世の人の心に遍くかなへむとす

本居宣長
國學者。賀茂眞淵の門人。伊勢松阪の人。紀州侯に仕ふ。享和元年九月歿す。荷田春滿、賀茂眞淵、平田篤胤と共に國學の四大人と稱せらる。(三九〇年—二四六一年)

玉かつま一の巻
 野草のすいろ
 にたまる玉が
 つまつみてこ
 ころを野べの
 すさびに
 初若菜一
 此言草よ、なに
 くれと敷おほく
 つもりぬるを
 いとくだくし
 けれど、ヤリす
 てむもさすがに
 て、かきあつめ
 むとするを、け
 ふはむ月十八日
 子日なれば、よ
 し有ておぼゆる
 ままに、まづこ
 の巻の名かく物
 しつ、次々のも
 又そのをりく
 思ひよらむま
 に何ともかとも
 つけてむとす。
 かたみとはの
 これ野澤の水
 ぐきの淺くみ
 じかきわかな
 なりとも
 本居宣長

るものにて、誠にあらず、心ぎたなし。たとへ世の人はいかに譏るとも、わが思ふすぢを枉げて従ふべきことにはあらず。人のほめそしりには拘るまじきわざぞ。大かた一むきに片寄りて、あだし説きごとをばわろしと咎むるをば、心せばく善からぬ事とし、一むきには片寄らず、あだし説きごとをもわろしとはいはぬをば、心廣くおいらかにて善しとするは、なべての人の心なめれど、必ずそ

あまの巻
 玉かつま
 此言草よ、なに
 くれと敷おほく
 つもりぬるを
 いとくだくし
 けれど、ヤリす
 てむもさすがに
 て、かきあつめ
 むとするを、け
 ふはむ月十八日
 子日なれば、よ
 し有ておぼゆる
 ままに、まづこ
 の巻の名かく物
 しつ、次々のも
 又そのをりく
 思ひよらむま
 に何ともかとも
 つけてむとす。
 かたみとはの
 これ野澤の水
 ぐきの淺くみ
 じかきわかな
 なりとも
 本居宣長

本居宣長 筆

も、わが思ふすぢを枉げて従ふべきことにはあらず。人のほめそしりには拘るまじきわざぞ。大かた一むきに片寄りて、あだし説きごとをばわろしと咎むるをば、心せばく善からぬ事とし、一

れさしもよき事にもあらず。憑るところ定まりて、それを深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそ寄るべけれ。それに違へるすぢをば取るべきにあらず。善しとして憑る所に異なるは皆悪しきなり。これ善ければかれは必ず悪しきことわりぞかし。然るをこれも善し、又かれも悪しからずといふは、憑るところ定まらず、信すべきところを深く信ぜざるものなり。憑るところ定まりて、それを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢの悪しきことをば、おのづから咎めざること能はず。これ信ずるまめ心なり。人はいかに思ふらむ、われは一むきに片寄りて、あだし説きごとをばわろしと咎むるも、必ずわろしとは思はずなむ。(本居宣長一玉勝間)

三、述懐



本居宣長遺愛の鈴

昨日は今日のむかしにて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中を、つくづくと思へば、あはれわが世も幾ほどぞや、手を折りて敷ふれば、はや三そぢにも餘りにけり。命長くて七十、八十生けらむにてだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれるやうなる身も、ゆくさき程なきこちのして、心ぼそくぞ覺ゆる。かくのみはかなく、心なき木草、鳥、けだもののおなじつらに、何すとしもなくあかし暮しつづ、生けるかぎりの世を盡して、徒に苔の下に朽ち果てなむはいとくち惜しく、いふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたり少く拙き身にしあれば、何事をし出でてかは世の人にまじりても數まへられ、亡スルからむ後の世に朽ちせぬ名をだにとどめましと、いとど人に似ぬ愚ささへまて取り添へてぞ、悲しく心憂かりける。さりとて、はた身をえうなきものにはふらかし果つべきにしもあらず、かくのみ拙く愚なる心ながら、何業にまれ怠なく、わざと心に入れ

て勉めたらむには、遂には一つ故づけて、なのめにし出づるふしも
 などは無からむと、あいなだあてのみにかかりてなむ、あかしあかししつ

(本居宣長—玉勝間)

この筆はいとわろし。三度四度ものすれど皆かぶろのやうになりぬとて、とみに物書く折は、墨も磨らで硯の水をかいまはし、書き果つれば投げおくにぞ、硯や祕閣のはざまなどに横たはりて、いつか先も釣針のやうになりて、かわきにかわきたるを、又惜しげなくたてざまに、干潟のあたりにて、音出づるばかりにかいまはし、あるは齒もて噛み碎き、又は墨もて筆のささをあしひしぎて書きつ。かくてはいかで命長かるべきよき筆をばまづかさ取るもしづめてし、物書いたるあとにても洗ひものし、紙におしあて又はすかし見て、一筋も亂さじとし、ておくめり、いとど命の長かるべきことわりなり。早くそじなむと思ふをば、いとあらあらしくなして、これ見給へ、三度四度にて早くかくなりきといふもをかし。(松平定信)

五 自然を喜ぶ

我が國の文學に、自然を吟詠したものの多いことはいふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つて居ることや、彫刻も人物よりも花鳥の方が多く、音樂も人聲よりも自然の音色に近いことや、又宮殿の朱塗の建築も、松杉の茂つた背景によつて一層その美をなすことなどを考へてみれば、我が國の古來の文學が、自然美をうたふことを殊に長所とし、生命として居つた所以はわかる。上古から近世に至るまで、歌の大半は花鳥風月の題詠であつた。

ゆきのうちに春は來にけり鶯の

こほれるなみだ今やとくらむ。

秋の夜の明るくも知らず鳴く蟲は

わがごともものや悲しかるらむ。

ゆきのうちに
の歌
古今集、讀人知
らす。
秋の夜の歌
同、藤原敏行の
作。

山風に云云
源氏物語の文な
り。

鹿はただ云云
源氏物語の文な
り。

などは、日本人が鶯やきりぎりすになつて歌を詠んだのである。散文の中にも、山風にたへぬ木木の木の葉も、峯の朽葉も、あわたたしう争ひ散れるまぎれに、といひ、

鹿はただ籬の下に佇みつつ、山田の引板にも驚かず、色濃き木どもの中にまじりてうち鳴くも憂へ顔なり。瀧の聲はいとど物思ふ人を驚かし顔に、耳かしがましう轟きひびく。草村の蟲のみぞより所なげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ心長うはひ出でて、露けく見ゆるなど、皆例の事なれど、折から處がらにやいと堪へ難きほどの物悲しさ。といつたのなどは、鹿も、瀧も、草も、蟲も、一切の景物が皆われ等同様の性情を有するものと見做したのである。修辭學では、これを擬人

法といふが擬人法はつまり天地、自然を人と同じに見たものである。人と天地、自然とが融合したのである。この天地と一體になつて融合するといふことが、我が和歌の生命であり、和歌を基礎とした多くの文學の生命であつた。人の感情を絞べるのにも、皆自然の景色をもつて表はすのである。涙の瀧といひ、袖の時雨といひ、露の袂といひ、花の心といひ、思の煙といひ、頭の雪といひ、消え入るといひ、時雨るといふ、自然の景色の語は直に吾人の感情の語である。人事と自然とを比較して、人生よりただちに自然をおもひ、自然よりただちに人生を思念するのである。これが、和歌から導かれて國文學全體を通じて、軍記、謠曲、淨瑠璃等、一般のものゝ根柢をなして居る。秋風といへば寂しいことを聯想し、春雨といへば、暖かい靜な感じがある。歌の語は、一つの慣習をなして、一種の情景を聯想させる力をもつて居る。俳句はこれを利用して十七字の小詩形をなし得た

のである。

春秋の争は、神話時代に已に春山霞男と、秋山下氷男といふものによつて現はれて居り、萬葉集になつては、額田女王は、紅葉をば折りてぞしぬぶと、春に對して秋山のあはれを稱へられた。源氏物語の六條院では、紫上、秋好中宮に春秋の好みが現はれて居る。四季の風景を絞して清少納言が、春はあけぼのから書きはじめ、兼好法師は、折ふしのうつり變ること、物毎にあはれなれなどと書いたが、貝原益軒も四季を、室鳩巢も春秋の争を論じてゐる。四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことは無い。この四季の景色と人事とを結び付けて感ずることは、即ちあはれを知るのである。源義家や、源頼政や、平忠度が、日本武士として如何にも優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知つたといふ事があるからである。太田道灌に關する、みの一つだに無きぞかなしきの話は、史實ではなく

春山霞男云云
古事記に出づ。

額田女王

歌人。その詠多く萬葉集に出づ。

紅葉をば云云

萬葉集卷一に

「天皇、内大臣藤

原朝臣に詔し

て、春山萬花の

艶、秋山千葉の

彩を競はしめ給

ふ時、額田王、歌

を以て判り給へ

る歌」として出

でたり。

貝原益軒

儒者。名は篤信、

通稱久兵衛。福

岡藩儒。著書多

し。正徳四年歿

す。(二九〇年

一三七四年)

室鳩巢

名は直清。木下

順庵の門人。徳川幕府の儒官。世に駿養先生と稱す。享保十九年八月歿す。(二三八八—二三九四年) 云云
 拾遺集、兼明親王(八重ひとへ花はさげども山吹のみの一つだになきぞあやしき)。

して傳説であらうが、歌を好んだ武士であるから、ああいふ傳説が附いたのであらう。頼朝も、尊氏も、秀吉も、暇のある時には風流の技を翫んだのである。狂言の萩大名は、大名の癖にこの風流を解せぬからをかしいのである。風流といふこと、詩的といふことの意味は、自然に向つての憧憬がその大半を形作つて居るのである。日本人の武士道は、西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬかはりに、自然の美を愛し物のあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりでは無い。日本人ほど國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどの位の數であらう。宮内省の毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠は居る。神社奉納の額面は到る處に小詩人の名を列ねて居る。短くて作り易い詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作つて、花

罪なくして云

後一條天皇の時の中納言源顯基の語。

雙が岡
 京都府葛野郡。

見、遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人は誠に忙しいのである。刑場に出づる罪人でも死に臨んでは一首を口吟むといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人であり、敘景詩人であるといつてもよろしい。

それ故、我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や插花に慰安を求める。昔は、罪なくして配處の月を見たいといつた人もあつたが、日本人が世の中を厭ふといへば、風流三昧に日を送る。西洋でいふ厭世は本當にこの世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法が無い。日本人の厭世は人事、社會がうるさいのである。人事、社會から遠ざかつて花鳥、風月に近づけば、それでいやな思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたといつても、一生行脚して花月を樂しんで居る。鴨長明は頻に世の中をあぢきなく思つたが、

元政上人

高僧。名は日政。
京都の人。深草
瑞光寺に住む。
持律嚴正、親に
仕へて至孝。寛

政八年二月寂
す。(二四一二年
—二四五六年)

太田垣蓮月

女歌人。名は誠、
寡居し陶器を製
し詠歌を書して
驚く。明治八年
十二月歿す。(二
四五一年—二五
三五年)

芳賀矢一

文學博士。東京
帝國大學名譽教
授。國學院大學
學長。福井縣の
人。昭和二年二
月歿す。(二五二
七年—二五八七
年)

方丈記の様子で見れば、庵室に入つて自然を楽しんで満足して居る。雙が岡の兼好法師はまだ十分に世の中がいがやとも見えぬから問題外である。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月尼でも、世の中に立ちまじるのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。(芳賀矢一「國民性十論」)

降るものは雪霰。霰はにくけれど雪のま白にてまじりたるをか。雪は檜皮青いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いとあほうは降らぬが、死の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをか。時雨、霰は板屋。霜も板屋。庭。(枕草子)

人づてに聞けば比企のやつといふ處に鳴きけりとぞ。もとより東路はみちの奥まで、昔より時鳥まれなるならひにやありけむ。一すぢに鳴かずばよし、まれにも聞く人ありけるこそ、人わさしけるよと、心づくしにうらめしけれ。(十六夜日記)

六 山路

山路に登りながら考へた。感情を交へて、思ひを述べ、人の世は住みにくい。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出来る。

人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向三軒兩鄰に、ちらちらする只の人である。只の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば、人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりもなほ住みにくからう。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所を、どれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人

非人情
俗情とはこれ
す

といふ天職が出来て、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引き抜いて、あり難い世界をまのあたり寫すのが詩である。畫である。あるひは音樂と彫刻とである。こまかに云へば、寫さないでもよい。只まのあたり見れば、そこに詩も生き歌も涌く。著想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せぬでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じて得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じて得るの點に於いて、かく煩惱を解脱するの點に於いて、かく清淨界に出入し得るの點に於いて、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於いて、我利私慾の羈絆を掃蕩する點に於

千金の子
史記に「千金之子不垂堂」。
萬乘の君

漢書刑法志に、
「天子畿方千里、
提封百萬井、定
出賦六十四萬
井、戎馬四萬匹、
兵車萬乘、故謂
萬乘之主」。

社会改良
子トピア
理想の社会

いて、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むにかひある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のある所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日にはかう思うて居る。喜の深きとき、憂愈深く、樂しみの大きな程、苦しみも大きい。これを切り放さうとすると、身が持つぬ。片付けようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寝る間も心配だらう。

閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へは後が不愉快だ。余の考がここまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が、仕損じの理合はせをすると

共に、余の腰は工合よく方三寸ほどな岩の上におりた。肩にかけた繪具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸と何の事もなかつた。立ち上る時に向を見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで、悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、つづき目がしかと見えぬ位霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりして居る。行く手は二町程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、さ程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切り碎いても

巖は始末がつかぬ。掘り崩した土のうへに悠然と峙つて、吾等のために道をゆづる景色はない。向で聴かぬうへは、乗り越すか廻らなければならぬ。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、その頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより、川底を涉るといふ方が適當だ。もとより急ぐ旅ではないから、ぶらぶらと七曲へかかる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて居たたまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。のどかな春の日を、鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴き暮さなければ、氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く、いつまでも登

つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空のうちに残るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落つる所を、際どく右へ切れて横に見おろすと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び揚がつて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚がる雲雀が互に擦れ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、揚がる時も、また互に擦れ違ふ時も、元氣よく鳴き續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ること忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴く

シエレー
英國の詩人。
（西曆一七九二年—一八二二年）

のだ。魂の活動が聲に現はれたものうちで、あれ程元氣のあるものはない。ああ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちに、覺えた所だけ誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。そのなかに、こんなのがある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるかな、われ。

腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとを、知れ。

なる程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に、神經が鋭敏なのかも

知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。そんならば詩人になるのも考へものだ。暫くは路が平かで、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へ伸して、真中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣を取られて、踏みつけたあとで、氣の毒なことをしたと振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮坐して居る。のん氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつき物かも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見て、嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も、櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て、自然の景物に接すれば、見るものも、聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位のことだらう。

然し、苦しみのないのは何故だらう。只この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只この景色が、腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ。この景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつつあるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は、ここに於いて尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、人の世につき物だ。余も三十年の間、それを仕通して飽き飽きした。飽き飽きした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰り返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄してしばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作で

も、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。

どこまでも世間を出ることが出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛



だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の陶勸工場にあるものだけで用を辨じてある。いくら詩的になつても、地面の上を駆けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シチレーが雲雀を聞いて歎

息したのも無理ではない。嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを脱したのがある。

採菊、東籬下、悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てく

採菊云云
晋の詩人、陶淵明の詩中の句。

獨坐云云
唐の詩人、王維の作。

不如歸
徳富廣花作の小説。
金色夜叉
尾崎紅葉作の小説。

る。垣の向に鄰の娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐、幽篁裏、彈琴、復長嘯、深林人不知、明月來、相照。

只二十字のうち、優に別乾坤を建立して居る。この乾坤の功德は

「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽車、汽船、權利、義務、道德、禮儀で疲れ果てた後、すべてを忘却して、ぐつぐつと寝込むやうな功德である。



(筆業廣崎寺)琴彈維王

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな

桃源

武陵桃源。陶淵明の桃花源記に見えたる仙境。

王維

唐の詩人。字は摩詰。草隸に巧に、又畫を善くす。(西曆六九九年—七五九年)

淵明

陶淵明。晉の詩人。字は元亮。靖節、又五柳先生と號す。(西曆三六五年—四二七年)

ファウスト

ゲーテ作の戯曲。

ハムレット

シェークスピア作の戯曲。

Hamlet

西洋人にかぶれて居るから、わざわざのん氣な扁舟を浮べて、この桃源に溯るものはないやうだ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を、今の世に布教して擴げようといふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも樂しみになるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりもあり難く考へられる。かうやつて只一人、繪具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそのそ歩くのも、全くこれが爲である。淵明、王維の詩境を、直接に自然から吸収して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願一つの醉興だ。
勿論、人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのであるまいし、王維も、好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寝た男でもなからう。やはり餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百

屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余もその通り、いくら雲雀と菜の花とが氣に入つたとて、山の中に野宿する程、非人情が募つては居らぬ。

飛卷

こんな所でも人間に逢ふ。ぢんぢん端折の頬冠や、赤い襷の姉さんや、時には、人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の槍に取り圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭みは中中取れない。それ所か、山を越えて、落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。(夏目漱石—草枕)

結廬在人境。而無車馬喧。問君何能爾。心遠地自偏。
採菊東籬下。悠然見南山。山氣日夕佳。飛鳥相與還。
此中有真意。欲辯已忘言。(陶淵明)

夏目漱石
文學者。名は金之助。東京の人。東京帝國大學助教。朝日新聞社員となる。大正五年十二月歿す。(二五二七年—二五七六年)

辰月七箇寒了

春秋（左傳）
（羊傳）

辰月七則（左傳）

辰月七則（左傳）

漢詩

彈學

國文學

塵鴉枯木

七 雲雀より

雲雀よりうへにやすらふ峠かな（男性的なもの）
 ほろほろと山吹散るや瀧の音
 ひと聲の江によこたふや時鳥（女性のもの）
 明月や池をめぐりて夜もすがら
 三井寺の門たたかばやけふの月
 物いへばくちびる寒し秋の風
 菊の香や奈良にはふるき佛たち
 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
 いざゆかむ雪見にころぶ處まで
 故郷や臍の緒に泣く年のくれ

元禄七年大阪
松尾芭蕉

詠歎助詞

三井寺
園城寺の俗稱。
滋賀縣大津市に
あり。天台宗寺
門派の總本山。

上島鬼貫
攝津伊丹の醸酒
家。浪花に流寓
す。元文三年八
月歿す。（二三二
一年—二三九八
年）

上島鬼貫

山口素堂

小西來山

榎本其角

榎本其角の筆蹟



榎頭で人をた
づれよ山ざく
ら 其角

其角

あきの空尾の上の松にはなれたり。

夕すずみよくぞ男に生まれける
夕立や家をめぐりて家鴨なく。

山口素堂
名は信章、通稱
市右衛門。甲斐
の人。江戸に住
す。享保元年歿
す。（二三〇二年
—二三七六年）

小西來山
十萬堂、又流瀧
翁と號す。大阪
の人。享保元年
十月歿す。（二三
一五年—二三七
六年）

榎本其角
近江堅田の人。
江戸に住す。芭
蕉の高弟。江戸
座。寶永四年二
月歿す。（二三
三一年—二三三
六七年）

服部嵐雪

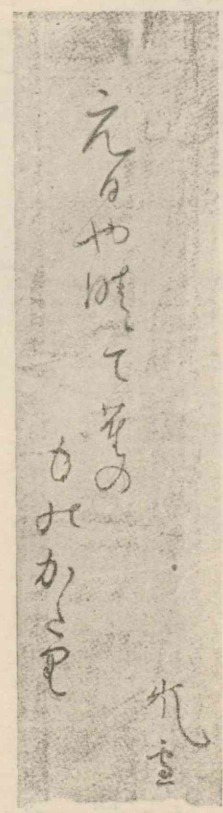
通稱彦兵衛。淡路の人。江戸に住す。芭蕉の高弟。雪門の祖。寶永四年十月歿す。(二三一四年—二三六七年)

嵐雪
元日や晴て雀のものがたり

稻妻やきのふは東けふは西。
名月やたたみのうへに松のかげ。

○
梅一輪一りんほどのあたたかさ。

服部嵐雪



服部嵐雪筆

蒲團著て寝たるすがたや東山。

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな。

越智越人

○
山寺に米つくほどの月夜かな。
散るときの心やすさよ罌粟の花。

越智越人
名は氏恆、通稱七兵衛。熊本藩士。芭蕉の高弟。元禄十五年三月歿す。(一二三六二年)

八 人生

一、心

顔回は志人に勞を施さじとなりすべて人を苦しめ物を虐ぐる
こと賤しき民の志をも奪ふべからず。

又幼き子をすかし、威しいひ辱しめて興することあり。おとなし
き人は誠ならねば事にもあらず思へど、をさなき心には身にしみ
て怖しく、恥しくあさましき思、誠に切なるべし。これを惱まして興
ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、悲し、樂し
むも皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも
心を傷ましむるは、人を害ふことなほ甚し。

病を受くることも多くは心より受く。外より來たる病は少し。藥
をのみて汗を求むるには效なきことあれども、一旦恥ぢ怖るるこ

顔回
字は子淵。孔門十哲の首。西曆前五十四年—前四八三年) 賤しき民の云云
論語に「子曰三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」。

凌雲の額云云
 三國志に魏明
 帝立凌雲觀、談
 先釘榜、乃以
 籠盛章、議、轉
 引上書之、去
 地二十五丈、既
 下、鑿髮皓然、選
 語、子孫直絶、
 此法也。

とあれば、必ず汗を流すは心のしわざなりといふことを知るべし。
 凌雲の額を書きて白頭の人となりし例なきにあらず。
 物に争はず、己を枉げて人に従ひ、我が身を後にして人を先にす
 るには如かず。よろづの遊にも勝負を好む人は勝ちて興あらむ爲
 なり。己が藝の勝りたることを喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべき
 こと、また知られたり。我が負けて人を喜ばしめむと思はば、更に遊
 の興なかるべし。人に本意なく思はせて我が心を慰めむこと、徳に
 背けり。

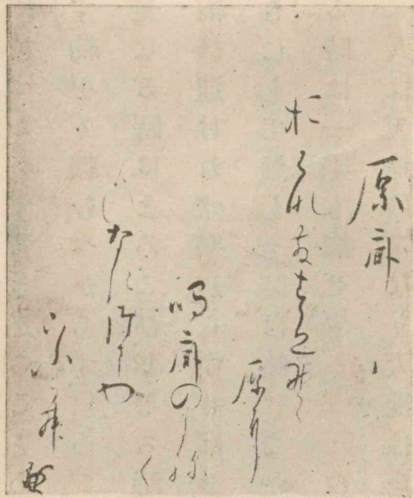
睦まじき中に戯るる、人をはかり欺きて、己が智の勝りたること
 を興とす。これ亦禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、永き恨
 を結ぶ類多し。これ皆争を好む失なり。
 人に勝らむことを思はば、ただ學問して、その智を人に勝らむと
 思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに争ふべからず

寺觀 直教
 反如若
 タハカル
 ハカル
 今

といふことを知るべきなり。大いなる職をも辭し、利をも棄つるは
 只學問の力なり。

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。己が

分を知りて、及ばざる時は速にや
 むるを智といふべし。許さざらむ
 は人のあやまりなり。分を知らず
 して強ひて勵むは己があやまり
 なり。貧しくて分を知らざれば盜
 み、力衰へて分を知らざれば病を
 受く。(徒然草)



原鹿
 おばな散す
 野の原に鳴鹿
 のまねくかひ
 なきつまやこ
 ふらむ 兼

一、頼むべからず

よろづの事は頼むべからず。おろかなる人は深く物を頼む故に
 恨み怒ることあり。勢ありとて頼むべからず。こはき者まづほろぶ。

孔子
名は丘、字は仲尼、周の聖人。敬王の四十一年歿す。(西曆前五一年―前四七九年)

財多しとて頼むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず、孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵も頼むべからず、誅を受くること速なり。奴従へりとして頼むべからず、背き走ることあり。人の志をも頼むべからず、必ず變ず。約をも頼むべからず、信あること少し。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右ひろければ障らず、前後遠ければ塞がらず。せばきはひしげ、砕く。心を用ゐる事少しきにして、嚴しき時は、物にさかひ争ひて破る。緩くしてやはらかなる時は、一毛も損せず。

人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性なんぞ異ならむ。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒これに障らずして、物のために煩はず。(徒然草)

三、主ある家

主ある家には、すすろなる人、心のままに入りくることなし。主なき處には、道行き人みだりに立ち入り、狐、梟やうのものも、人げにせかれねば、處得がほに入り、栖み、木精などいふけしからぬ形も現はるるものなり。我らが心に念念のほしきままに來たり浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中にそこばくの事は入り來たらざらまし。(徒然草)

風疎竹ニ來タル、風過ギテ竹ニ聲ヲトドメズ。雁寒潭ヲ度ル、雁去ツテ潭ニ影ヲトドメズ。故ニ君子ハ事來タツテ心始メテ現ハレ、事去ツテ心隨ツテ空シ。(菜根譚)

君子ハ青天ニ對シテ懼ルレドモ、雷霆ヲ聞イテ驚カズ。平地ヲ履ミテ恐ルレドモ、風波ヲ歩ミテ駭カズ。(醉古堂劍掃)

白沙泥ニ在レバコレト俱ニ黒シ、漸染ノ習久シケレバナリ。他山ノ石以テ玉ヲ攻ムベシ、切磋ノ力大イナレバナリ。(同)

漫

衡立

成經
藤原成親の子。
建仁二年薨す。
(一八一六年—
一八六二年)
康賴
平氏。官檢非違
使尉に至る。
鹿瀬
佐賀縣佐賀郡。
父大納言
藤原成親。治承
元年八月十九日
殺さる。一七九
八年—一八三七
年)
有木
岡山縣賀陽郡庭
瀨村。
三尊
阿彌陀如來とそ
の左右の脇土觀
音勢至の二菩薩
とをいふ。

九 (丹波)少將都歸

治承三年正月下旬に、丹波の少將成經、平判官康賴、入道二人の人
人は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へと急がれけれども、餘寒も
いまだ烈しく、海上もいたく荒れければ、浦づたひ島づたひして、二
月十日頃にぞ備前の兒島には著き給ふ。
それより、少將は父大納言殿の御わたりありし有木の別所とか
やに尋ね入りて見給へば、竹の柱、舊りたる障子などに書き置き給
ひつる筆のすさびを見給ひて、あはれ人のかたみには手蹟に過ぎ
たる物ぞなき。書き置き給はずばいかでこれを見るべきとて、康賴
入道と二人讀みては泣き、泣きては讀む。安元三年七月二十日出家。
同じき二十六日信俊下向とも書かれたり。さてこそ源左衛門尉信
俊が参りたるをも知られられ。傍なる壁には、三尊來迎便あり。九品

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
睦如 生 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
早 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
水 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
文 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
葉 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
長 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
伊 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
神 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
部 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如
志 卯 彌 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如 睦 如

上 中 下
山 山 山
山 山 山
山 山 山

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
キ ヤ ウ サ ミ フ ハ カ シ
三 二 一

往生疑なしとも書かれたり。この記念を見給ひてこそ、さすが欣求
淨土の望もおはしけりと、限なき歎の中にも聊かたのもしげには
宣ひけれ。
その墓を尋ねて見給へば、松の一
簇ある中にかひがひしく壇を築き
たることもなく、土の少し高き所に
向ひ、少將袖搔きあはせ、生きたる人
に物を申すやうに、泣く泣く搔きく
どきて申されけるは、遠き御守とな
らせおはしましたる事をば、島にて
もかすかに傳へ承はつて候ひしか
ども、心に任せぬ憂き身なれば、急ぎ
参ることも候はず。成經かの島に流されて後の便なき、一日片時の



古板本挿畫

九 丹波少將

五三

鳥羽
京都府紀伊郡

秋の山
鳥羽にあり。

命もあり難くこそ候ひしかども、さすが露の命は消えやらで、この二年を送りて、今召し還さるる嬉しさもさる事にては候へども、父大納言殿のまさしくこの世に渡らせ給はむを見參らせても候はばこそさすが命の長きかひも候はめ。これまでは急がれつれども今日より後は急ぐべしとも覺えずとて、搔きくどきてぞ泣かれける。まことに存生の時ならば、大納言入道殿こそいかにとも宣ふべきに、生を隔てたるならひ程恨めしきことはなし。苔の下には誰か答ふべき。ただ嵐に騒ぐ松の響ばかりなり。其後はよしすから

(同じき)三月十六日、少將鳥羽に明うぞ著き給ふ。故大納言殿の山莊、すあま殿とて鳥羽にあり。それに立ち寄り見給へば、住み荒らして年經にければ、築地は在れどもおほひもなく、門はあれども扉もなし。庭に立ち入り見給へば、人迹絶えて苔深し。池のほとりを見まはせば、秋の山の春風に白浪頻に織りかけて、紫鴛、白鷗逍遙す。興ぜ

紫鴛白鷗云云
本朝文粹、源順、
「東顧」亦有「林
塘之美、紫鴛白
鷗逍遙於朱檻
之前」。

一月
三月
二月
九月
八月
七月
六月
五月
四月
三月
二月
一月

桃李不言云云
菅原文時之作。
故里の云云
後拾遺集、出羽
辨の歌。

し人の戀しさに、只盡きせぬものは涙なり。家はあれども、羅文破れて、葺遣戸も絶えてなし。ここには大納言殿のむこそおはせしか。この妻戸をばかくこそ出で入り給ひしか。あの木をば自らこそ植ゑ給ひしか。などいひて、言の葉につけても、只父の事をのみ戀しげにこそ宣ひけれ。

三月中の六日なれば、夜はいまだ名残あり。楊梅、桃李の梢こそ折しり。顔にいろいろなる。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將花のもとに立ち寄りて、

桃李不言 春幾暮 煙霞無迹 昔誰栖

故里の花のものいふ世なりせば
いかにむかしのことを問はまし。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折ふしあはれに覺えて、墨染の袖をぞ濡らしける。暮るる程とは待たれけれども、餘に名

七條河原
鴨川の西岸。

院
後白河院。

殘惜しくて、夜更くるまでこそおはしけれ。更け行くままに、荒れたる宿のならひとて、古き軒の板間より洩る月影ぞ隈もなき。さてしもあるべき事ならねば、迎に乗物ども遣はして待つらむも心なし。とて、少將泣く泣くすあま殿を出でて都へ歸り上られけり。人人の心のうち、さこそ嬉しくも亦哀にもありけり。

康頼入道が迎にも乗物はありけれども、今更名殘の惜しきにとて、それには乗らず、少將の車の尻に乗りて、七條河原までは行き、それより行き別れるが、尙行きもやらざりけり。花の下の半日の客月の前の一夜の友旅人が一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立ち寄りて分るる名殘も惜しきぞかし。況やこれは憂かりし島のすまひ、船の中、波の上、一業所感の身なれば、先世の芳縁も淺からずや思はれけむ。
少將はもとの如く院に參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。

東山
京都市の東方に連亘する一帯の山脈。

寶物集
七卷。佛法を費とすることを記せり。

康頼入道は東山雙林寺にわが山莊のありければ、それに落ち著きて、まづかくぞ思ひ續けける。

おもひしほどは洩らぬ月かな
やがてそこに籠居して、憂かりし昔を思ひやり寶物集といふ物語を書きけりとぞ聞えし。(平家物語)

かの足利史をもて最暗黒なる國史の部分なりと思へるものは、おそらくひとり勤王の觀察點よりのみ、わが帝國史を讀める批判家ならんか。心理的方面より觀察せば、二千五百餘年の過去中最も悲しむべき、最もいたむべき、最も恐るべき罪惡史は、白河院の御宇に萌して、長く綿綿たる業因をひき、かの愚管抄の著者をして「道理以外なり」と暗示せしめし承久の亂に至りて一頓挫せるにはあらざるか。然してその罪惡史の絶頂は、蓋し頼朝が死後に於ける鎌倉將軍家の二代史なるべし。(坪内逍遙)

源順
歌人。學者。梨
壺五人の一。後
撰集撰者の一
人。和名抄の著
者。永祿元年卒
す。(一五七一年
一六四三年)



(筆實信傳) 順 源

一〇 照る月なみ

屏風に月すまね地ある家と遊りけるお

源 順

水はねもよてる月のみを

おそれば

こよひぞ枯の

もなつさうりける

法師のねらむとねらひこそけ

つ頂月をみけがうそ

藤原高光

藤原高光
師輔の子。右近
衛少將に至る。
出家して覺如と
號し、多武峯に
居る。正暦五年
卒す。(一六五
四年)

素性法師
僧正通昭の子。
俗名良岑玄利。
出家して石上良
因院に住す。

壬生忠岑
初は藤原定國の
隨身。後に御書
所に候し、攝津
大目に至る。古
今集撰者の一
人。

からげうりてさくらちるよみ中に

うらやうりともすある月くれ

花感に京紙な布りてよある末性法師

みわつせはねらぎ橋をこきよせて

みやうさうまわりのきりける

婦人みよりける時よある 壬生忠岑

漱をせがば海とわりのよとみたり

ふげとむらうらみづられき

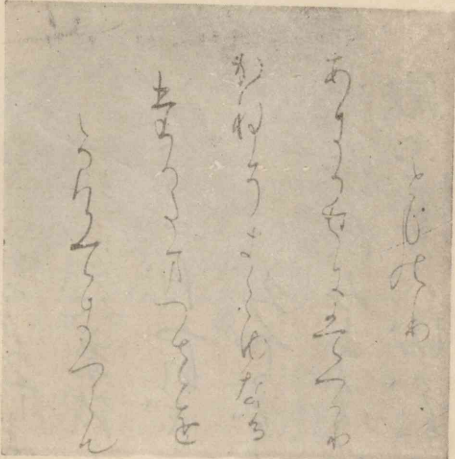
大和の園よりみりける時よ雪けり

阪上是則
大内記たり。延
長二年從五位下
加賀介となる。

ものり
あきかぜには
つかりがれそ
きこゆなるた
がたまづさを
かけてきつら
ん

右大將藤原朝
臣
定國をいふ。高
藤の子。世に泉
大將とよぶ。(一
五二七年—一五
六六年)
凡河内躬恆
延喜二十一年淡
路權掾に任ぜら
る。古今集撰者
の一人。

けつをみくよめ
阪上是則
○新ぼろありぬれ月とるもて
よ
よ
よ



傳紀貫之筆

住の江の山に...
まのなをれれを枝をせうく...
凡河内躬恆

志賀の山越

志賀の山越
洛北白河より滋
賀縣滋賀郡滋賀
村に通ずる山
路。

紀貫之

望行の子。御書
所預、大内記、土
佐守、玄蕃頭、
木工權頭に歴任
し。天慶九年卒
す。古今集撰者
の一人。(一六
〇二年)

紀友則

貫之の姪。延喜
の初、大内記と
なる。古今集撰
者の一人。

小野小町
出羽守良貞の女
といふ。

志賀の山越
人のわれれけつを
むすぶのうづみ
あごも人よわれわ
橋は花のちるをよめ
ひもつたの光は
うづはれく花のちる
類まらぶ
小野小町

○花のつらけりけり
照る月なみ

僧正遍昭
 俗名良岑宗貞。
 大納言安世の
 子。藏人頭とな
 る。仁明天皇の
 崩御を悲しみて
 剃髮し、遍昭と
 號す。寛平二年
 正月寂す。(一四
 七六年—一五五
 〇年)

藤原敏行朝臣
 書家。宮土麿の
 子。左近衛中
 將。延喜七年卒
 す。(一五六七年)
 業平朝臣
 歌人。在原氏。
 阿保親王の第五
 子。右馬頭、右近
 衛中將、相模美
 濃權守を歴て、
 元慶四年五月卒
 す。(二四八五年
 —二五四〇年)

秋平のしつと

わづみよきふるなごせしめに
 遠む家をもくよあり 僧正遍昭
 けちの榮のまうにまねはあり
 いかさほねをむとあざむく
 秋たつるよあり 藤原敏行朝臣
 あきつわとめまけさやうみえねども
 ぬねねとよおねごらつねわら
 病してよわくなつる時よあり 業平朝臣
 ほひよゆく道をはるねてきしじ
 時をけつをはねむらじしき

鳥羽殿
 京都府紀伊郡に
 ありし離宮。
 白河殿
 同府愛宕郡にあ
 りし離宮。
 水無瀬
 同府乙訓郡。

一一 水無瀬殿



建久九年正月十一日、第一の御子土御門院四つになり給ふに、御
 位譲り申させ給ひており給ふ。御年十九位
 におはしますこと十五年なりき。けふあす
 二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべ
 き御事なれども、よろづ所せき御有様より
 は、なかなか安らかに、御幸など御心のまま
 ならむとにや。世をしろしめす事は今も變
 らねば、いとめでたし。
 鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて常に渡りすまはせ給へ
 ど、なほまた水無瀬といふ所に、えもいはず面白き院造して、しばし
 ば通ひおはしましたし、つつ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり

一一 水無瀬殿

世を響かして遊をのみぞし給ふ所がらもはるばると川に臨める
 眺望いと面白くなむ元久の頃詩に歌を合はせられしも取り分き
 てこそは

見渡せば山もとかすむみなせ川

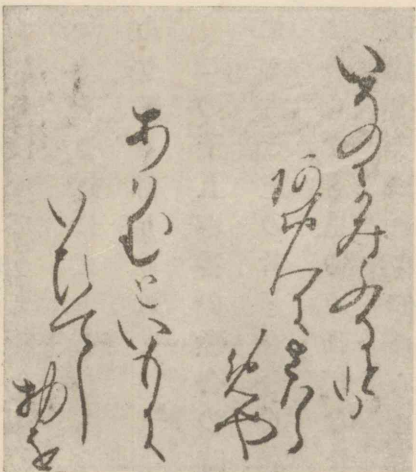
ゆふべは秋となに思ひけむ

院 後鳥羽上皇。
 基通 近衛基政の子。
 天福元年五月薨す。(一八二〇年—一八九三年)
 土御門の内の
 おとど 内大臣源通親。

茅葺の廊渡殿などはるばると艶にかしうせさせ給へり御前の
 山より瀧おとされたる石のたすまひ苔深き山木に枝さし交
 したる庭の小松もげにげに千世を籠めたる霞の洞なり
 今の攝政は院の御時の關白基通の大臣その後後京極殿良經
 ときこえ給ひしいと久しくおはしきこのおとどはいみじき歌の
 聖にて院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける文
 治の頃千載集ありしかど院いまだきびはにおはしまししかばに
 や御製も見えざるを當帝位の御程にまた集めさせ給ふ土御門

右衛門督通具
 正二位大納言に
 至る。
 有家 藤原氏重家の
 子。
 攝政殿 九條良經。

いそのかみふ
 るともあめに
 さはらめやあ
 はむといしに
 いひてし物を



藤原 良經 筆

の内のおとどの二郎君右衛門督通具といふ人をはじめにて有家
 の三位定家の中將家隆雅經などに宣はせて昔より今までの歌を
 ひろく集めらるおのおの奉れる歌を院の御前にて自ら磨きとと
 のへさせ給ふさまいと珍しく面白
 しこの時も先に聞えつる攝政殿取
 りもちて行はせ給ふ

ながら猶このなみには立ち及びがたしと卑下させ給ひて判
 詞をば記されず御歌にて優り劣れる志ばかりをあらはし給へり
 なかなかいと艶に侍りけり上のその道を得給へれば下もおのづ

俊房 源氏。師房の子。
保安二年十一月
薨す。(一六九五
年)一七八一
年)
亡せにし人
右京大夫師光。

から時を知るならひにや、男も女も、この御代に當りて、よき歌よみ
多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、
俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれば、はやは貴族であつたが、
つかさ淺くて、うち續き四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだ
いと若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いと
あり難く侍りけれ。

この千五百番の歌合の時、院の上宣ふやうに、こたみは、皆世にゆり
たる古き道の者どもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしう
はあらずと見ゆめればなむ構へて、まるがおもて起すばかり、よき
歌仕うまつれと仰せらるるに、面うち赤めて涙ぐみ候ひけるけし
き、限なき程もあはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、い
づれもとどりどりなる中に、
うすくこき野邊の緑の若草に

春日殿

京都市一條の北
にある春日の
社。

あとまで見ゆる雪のむらぎえ。

草の緑の濃き薄き色にて、こぞのふる雪の遅く疾く消えける程を
推し測りたる心ばへなど、まだしからむ人はいと思ひより難くや。
この人年積るまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神
をも動かしなましに、若くて失せにし、いとほしくあたらしく
なむ。

かくてこの度撰ばれたるをば新古今といふなり。元久二年三月
二十六日、竟宴といふこと春日殿にて行はせ給ふ。いみじき世の響
なり。かの延喜の昔思しよそへられて、院の御製、
いそのかみ古きを今に並べこし
昔のあとをまたたづねつつ。

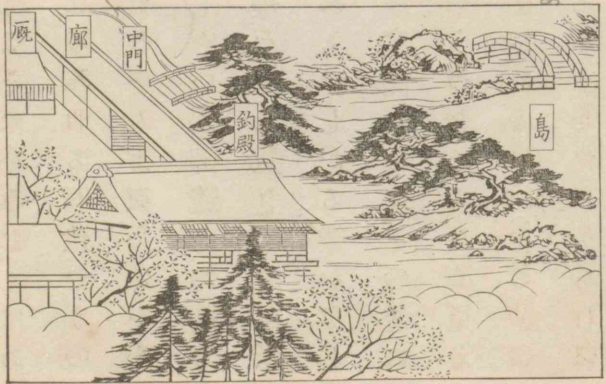
攝政殿

敷島ややまことばの海にして

修明門院
藤原重子。順德
天皇の御母。文
承元年薨す。(一
九二四年)

ひろひし玉はみがかれにけり。
次ぎ次ぎずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。
かくて院の上は、ともすれば、水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴笛
の音につけ、花紅葉のをりをりに觸れて、よろづの遊業をのみ盡し
つつ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠によろづ世も盡きすまじき
御世の榮つぎつぎ今よりいと頼もしげにぞ見えさせ給ふ。御碁打
たせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ心のひきひき
に挑み争はせさせ給へば、あるは小弓、雙六などいふ事まで、思ひ思
ひに勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまさまの
興ある賭物ども、取るでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、
修明門院の御方へ、何にてもをのこどもに賜はせぬべからむ賭物
と申させ給ひたるに、取りあへず、小さき唐櫃の金物したるがいと
重らかなるを參らせられたり。この御使のうへ人、何ならむといと

いぶかしくて、片端ほのあけて見るに、錢なり、いと心得ずなりて、さ
と面うち赤みて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせ
て、朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。
かばかりの事知らぬやうやはある。いに
しへより、殿上の賭弓といふ事には、これ
をこそ賭物にはせしか。されば、今賭物と
申したるに、これをしも出だされたるな
聞えたるに、これをしも出だされたるな
む、いにしへの事知り給へるこそいたき
業なれ」と、ほほ笑みて宣ふに、さは悪しく
思ひけりと、心ち騒ぎて覺ゆべし。
大方この院の上は、よろづの事にいた
り深く、御心も花やかに、物に精しうぞお
はしましける。夏の頃、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水めし



釣殿

近き川の云云
源氏物語常夏の
巻の一節

近き川の云云
源氏物語常夏の
巻の一節

拾はば消えな
む云云
源氏物語帯木の
巻に出づ

て、水飯やうの物など、若き上達部、殿上人どもに賜はさせて、大御酒
 参るついでにも、あはれいにしへの紫式部こそは、いみじくはあり
 けれ。かの源氏物語にも、「近き川の鮎、西川より奉れる石伏やうの物、
 御前に調じて」と書けるなむ、勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの
 料理仕りてむやなど宣ふを、秦のなにがしといふ御隨身、勾欄のも
 と近く候ひけるが、承はりて、池の汀なる笹を少し敷きて、白き米を
 洗ひて奉れり。拾はば消えなむとにや、これもけしがる業かなとて、
 御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御かはらけ度度聞しめす。その道にも
 いとはしたなう物し給ふ。何事も、あいぎやうづきめ、めでたく見えさ
 せ給ふ御有様千歳を經とも飽く世あるまじかめり。(増鏡)

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海面よりは少し引
 き入りて、山陰にかた添へて、大きやかなる巖の敲てるを便にて、松の
 柱に蘆葺ける廊など、けしきばかり事そぎたり。まことに柴の庵の只
 暫しと假初に見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、故づき
 てしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになむ。(増鏡)

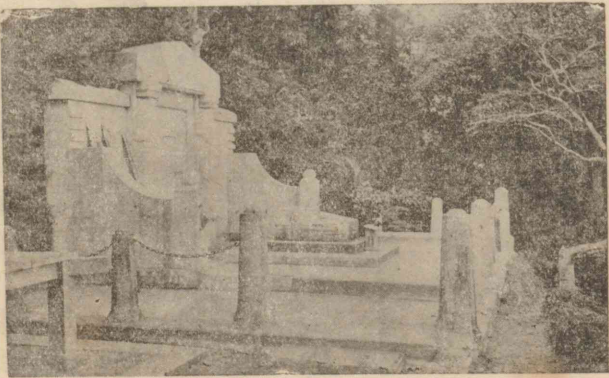
解脫、佛流、煩惱、束縛を解

一二 死と永生

冥樂、生滅をけふか
 寂莫、煩惱(怒り)の流
 縛、えりまを、ほうこし
 桑、流の、支那の、浸
 人、世の、変化の、甚
 流、々、水、勢、盛、て、
 泪、々、水、の、流、の、さ、

死は生きとし生けるものの免るべか
 らざる運命なり。それ唯免るべからざる
 運命なり。故にまた避くべからざる問題
 なり。されど世に生を惜しむ人はあれど
 も、死を惜しむ人は少く、生に就いて慮る
 人はあれども、死に就いて考ふる人は稀
 なり。訝しからずや。

如何にして生くべきか。これ人生の大
 いなる疑問なり。されど如何にして死す
 べきかは、更に大いなる疑問にあらざる
 べきか。われ等は歴史を讀みて、大いなる宗教の起るを見たり。され



高 山 樓 牛 の 墓

釋迦
 名は悉達多。中
 印度迦毘羅城主
 淨飯王の子。佛
 教の開祖。(西曆
 前五五七年―前
 四七七年)
 四苦
 生老病死。
 耶蘇
 猶太に生まる。
 基督教の開祖。
 (西曆前四年―
 二九年)

ど宗教とは生きんが爲の教にあらずして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脫の道を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永生の道を開きぬ。解脫や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地、人生の理法を明かにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは、つまり死を安からしむるの謂にあらずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠をいふは、これ即ち死後の世界をいふなり。あはれその生を見て、その死を見ざるものは、人生の根本を遺れたりといふべし。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人人死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは、死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。死

吾人はすべからく現代を超越せざるべからず
 樗牛

涅槃
 無爲、圓寂、寂滅、不生不滅など譯す。梵語。

は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的なり。かの生死の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。われ等は生を知り、いまだ死を知らず。如何ぞその優劣を知らん。人生の價値は絶對なり、他に比すべきものなし。厭世といひ、樂天といふ、われ等その何の意

吾人けむかしく現代を超越せざるべからず
 樗牛

高唯人生の實在せるを知るのみ。
 筆牛樗山

さざるべからず。死は萬物の運命なり。されど、われ等は死を超越してその永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題ここに集まる。世に佛に願ひて涅槃の寂寞を求むるものあり。されど形骸を離

れて魂魄なきを如何にすべき。又その墳墓を壯大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標ひとり全きを得べけんや。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存するところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到るところに釋迦あり。耶蘇は十字架にかかりきと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するものの胸には楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところにワットの血液あり。電氣の線のかかるところは即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深きを加へ、人と共に廣きを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、

ワット

英國の技師。

蒸氣機關の發

明者。西曆一

七三六年一

八一九年)

フランクリン

米國の政治

家、學者。夙に

電氣學を研究

し。避雷針を發

明す。米國獨

立戰役に功多

し。(西曆一七

〇六年一七

九〇年)

Franklin

蕩蕩汨汨として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明は、かくのごとき幾多永生の結果に外ならざるなり。

わが少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。その年の弱きを以て早しとすること勿れ。死を想はずして生くるは空しく生くるなり。その死をして憾無からしめんと欲せずして、ひとりその生の完からんことを望むは、これ的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最も好くこの問題を解釋したるものは哲人傑士なり。(高山樗牛——樗牛全集)

十七八の死が惜しければ、三十の死も惜し。八九十、百になりても、これで足りたといふことなし。草蟲水蟲の如く半年の命の者もあり、これを以て短しとせず。松柏の如く數百年の命の者もあり、これを以て長しとせず。何年生きたれば氣が濟むことか。前のめどもあることか。浦島武内も今は死人なり。人間僅か五十年、人生七十古來稀なり。何か腹のいえるやうな事をやつて死なねば、成佛は出來ぬぞ。(吉田松陰)

歳尾
元祿十五年。

都文公
土屋主税。本所
松阪町なる吉良
家の鄰家に住め
り。

堀部彌兵衛
名は金丸。江戸
留守居。死を賜
はる時年七十
七。(二二八七年
—二二六三年)

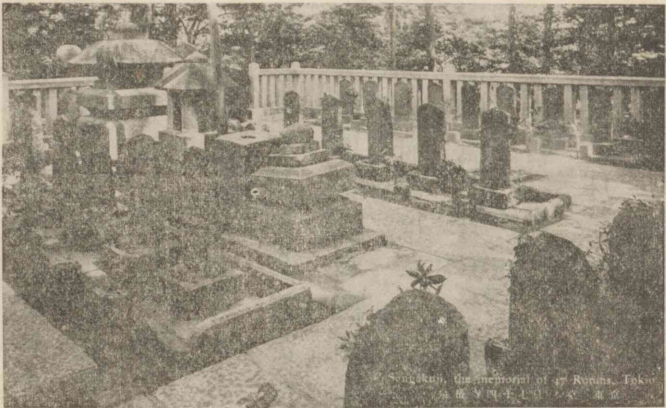
一三 討入の光景を報ず

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、露の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へも宜しく御傳へ下さるべく候。然れば、去る十四日、本所都文公に於いて年忘の一興御催あり。嵐雪、杉風、我等も一席にて、折から雪面白く降り出し、風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして、夜ただ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吠えず、打ち静まり、文臺料紙も押し片寄せ、四五人集まりて蒲團を被き、夢の浮世といふ間もあらせず、劇しく門を叩く者兩人、玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衛、大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へおし寄せ、亡君年來の遺恨を果たさんため、大石内

大高源五

名は忠雄。俳諧
を善くし、子葉
と號す。死を賜
はる時年三十二。
(二二二二年—
二二六三年)
吉良上野介
名は義央。高家。
(二二二二年—
二二六三年)
大石内藏助
名は良雄。淺野
家の家老。死を
賜はる時年四十
五。(二二一九年
—二二六三年)

藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討ち取り候間、御鄰家の御好



泉岳寺義士の墓

み、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を厳しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候。といひも果たさず立ち出づる、その風情、神妙なる事いふべくもあらず。今は俳友もこれまでなりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見んとて門前に走り出づれば、各吉良家に忍び入り候程に、わが雪と思へば、輕し笠の上、と高高と一聲よばはり、門を閉ぢて内を守り、屏越に提燈とも

大石主税
名は良金。良雄の子。死を賜はる時年十六。(二三四八年―二三六三年)

し、始終を伺ふに、その寒さ骨身に浸み、女人の叫童子の泣聲、風飄飄と吹き誘うて、曉天に至りては、本懐已に達したりとて、大石主税、大高源五、物穩便に謝儀を述べたること、あつはれ武士の譽といふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷。

申し捨てたる源五が精神いまだ眼前にのこり候。貴分年來の御入魂ゆゑ、具に認め進じ申し候。早春の内かれこれ御さしくり御出府候はば、かの落著も承はり届け、餘儀なく伏劔に及び候はば、竊に追善をも相營み申すべく存じ候。まづは餘日もこれなく、書外貴面の時を期し候。恐恐謹言。

十二月二十日

其角

文 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ。

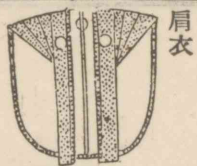
文璘
俳人。梅津氏。通稱牛左衛門。秋田藩士。

一四 世界の借屋大將

室町菱屋長左衛門借屋に居られし藤市と申す人、廣き世界にならびなき分限、我なりと自慢申せし仔細は、二間口の糊借にて千貫目持、都のさたなりしに、烏丸通りに三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり、これを悔みぬ。今までは借屋にゐての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴史の内藏の塵埃ぞかし。この藤市利發にして、一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。この男家業のほか、に反古の帳をくくりおきて、店を離れず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢小判の相場をつけおき、米問屋の賣買を聞きあはせ、生薬屋、呉服屋の若い者に長崎の様子をたづね、練綿、鹽、酒は江戸棚の状日を見あはせ、毎日萬事を記しおけば、紛れぬる事はこ

室町
今の京都市上京區のうら。

長崎
長崎縣長崎市。江戸時代唯一の開港場。



肩衣

鳥部山

京都洛東。古來の墓所。

六波羅

今の京都市下京區六波羅密寺、方廣寺の邊。

苦參



ここに尋ね、洛中の重寶になりける。不斷の身持肌大木綿綿入の木綿着物に單縹絆大布子綿三百目入れて、一つより外に著ることなし。袖覆輪といふことこの人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、つひに大道を走りありきし事なし。一生のうち絹物とては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引、又は一寸八分の巴を付けて、土用干にも疊の上にぢかには置かず、麻袴あしはらひに鬼緋おにびの肩衣かたぎ幾年か折目正しく取り置かれける。町竝に出る葬禮には是非なく鳥部山に送りて、人よりあとに歸りさまに、六波羅の野道にて丁稚もろ共苦參くさんを引いてこれを陰干にして、腹藥なるぞと只は通らず、蹴つまづく所で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙けむりを立つる世帯持はよろづかやうに氣を付けずしてはあるべからず。この男生まれついて慳けんきにあ

右 鷗水
長持に春かく
れ行更衣



井原西鶴

らず、萬事の取りまはし、人の鑑にもなりぬべき願ひ。かほどの身代まで、年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人づかひ、諸道具の取置もやめんどかましきとて、これも利勘りかんにて大佛の前へ誂へ、一貫目に付き何程と極めける。十二月二十八日の曙急ぎて荷にせひつれ、藤屋店ふじやにならば「受け取り給へ」といふ。餅は搗立の好もしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ貌して十露盤置きけるに、餅屋は時分柄しぶんがらにひまを惜しみ、幾度か斷りて才覺さいかくらしき若い者、杠秤かやうの目りんと受け取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅受け取つたかといへば、はや渡して歸りぬといふ。この家に奉公する程にもなき者ぞ。ぬくもりの冷めぬを受け取りし事よと、又目を懸まけつるに、思の外おもひの外にかんのたつ事、

東寺
眞言宗總本山。
八幡山教王護國
寺といふ。京都
市下京區。

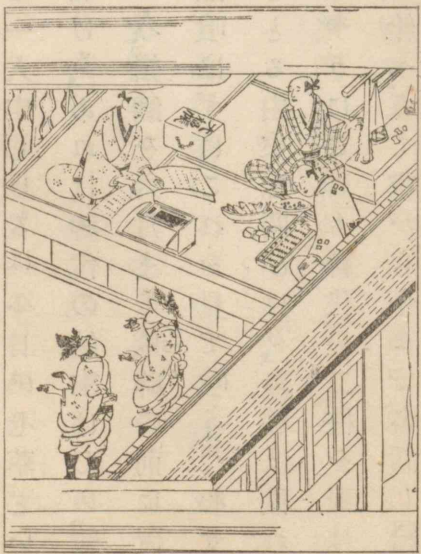


多田の銀山
多田は今の兵庫
縣河邊郡多田
村。その銀山は
廣さ六十六村に
亙り、豊臣氏よ
り徳川氏に及び
て採掘盛なり
き。

手代我を折りて喰ひもせぬ餅に口をあきける。
その年明けて夏になり、東寺あたりの里人茄子の初生を目籠に
入れて賣り來たるを、七十五日の齡これ樂しみの一つは二文、二つ
は三文に直段を定め、いづれか二つとらぬ人はなし。藤市は一つを
二文に買ひていへるは、今一文で盛なる時は大きなるがありと心
を付くる程の事あしからず。屋敷の空地に柳、柊、讓葉桃の木、花菖蒲、
薺、苡仁など取りまぜて植ゑ置きけるは、一人ある娘が爲ぞかし。菫
垣に自然と朝貌の這ひかかるを、同じ眺にははかなき物とて、刀豆
に植ゑかへける。何より我が子を見るほど面白きはなし。娘おとな
しくなりて、やがて嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡しを見せ
たらば見ぬ所を歩きたがるべし。源氏、伊勢物語は心のいたづらに
なりぬべき物なりと、多田の銀山出盛の有様書かせける。この心か
らは、いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、

ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。親の世智なる事を見習ひ、八歳
より墨に袂をよごさず。節供の雛遊をやめ、盆に踊らず。毎日髪かし
らも自ら梳きて丸鬢に結ひて、身の取廻し人手にかからず。引きな
らひの眞綿も著丈の豎横を
出かしぬ。いづれ女の子は遊
ばすまじきものなり。

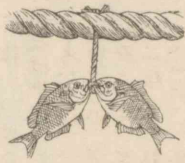
折節は正月七日の夜、近所
の男子を藤市かたへ、長者に
なるやうの指南を頼むとて
遣はしける。座敷に燈耀かせ、
娘をつけ置き、露路の戸の鳴る時を知らせと申し置きしに、この娘
しほらしく畏まり、燈心を一筋にして、物まうの聲のする時、元の如
くにして勝手に入りける。三人の客座に著く時、臺所に摺鉢の音響



原本挿繪

大矢粉

1600
4000
23500



掛鯛

井原西鶴
大阪の小説家、
俳人。松壽軒、
二萬堂等の別號
あり。元祿六年
八月歿す。(二三
〇二年—二三三
三年)

山藤 丑

きわたれば、耳を悦ばせ、これを推して、「皮鯨の吸物」といへば、「いやいや、初めてなれば、雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて、「煮麪」とおち著きける。必ずいふ事にしてをかし。藤市出でて三人に世渡りの大事を物語して聞かせける。一人申しけるは、「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ」と尋ねける。あれは神代の始末はじめ、雑炊といふことを知らせ給ふ。又一人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ぬ。あれは朝夕に魚喰はずに、これを見て喰うた心せよといふことなり。又一人、太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時白げて、一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表はすなり。よくよく萬事に氣をつけ給へ。さて宵から今まで各話し給へば、最早夜食の出づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の摺鉢の音は、大福帳の上紙に引く糊を摺らした」といはれし。

(井原西鶴—日本永代藏)

「煮麪」は「煮うどん」のこと

四方赤良

本名太田 翠、通稱七左衛門。蜀山、南畝等の別號あり。徳川幕府の士。文政六年四月歿す。(二四〇九年—二四八三年)

ほととぎす鳴つる跡にあきれたる後徳大寺の有明のかほ 蜀山

唐衣橋洲

本名小島温之、通稱源之助。醉竹庵と號す。享和二年七月歿す。(二四〇三年—二四六二年)

鹿津部眞顔

通稱北川嘉兵衛。文政調俳諧歌の祖。文政十二年六月歿す。(二四一三年—二四八九年)

一五 うへ野山

花

いちめんの花は碁盤の上野やま

黒門まへにかかる

しらくも。

西行庵にて 唐衣橋洲

文覺のこぶしの

花は色もなし

西行ざくらゑみを

ふくめば。

柳 鹿津部眞顔

あらそはぬかぜの柳の絲にこそ



蜀山人自畫自跋

こぶし 辛夷

つぶり光

名は誠之。通稱岸宇右衛門。蜀山の門人。寛政八年四月歿す。(一四五六六年)

誰謂雀無竹、何以鸞我竹、誰謂有我家、何以琴三汝宿、真顔

くれ竹のれぐら尋てなれもまたさえたにきなく雀色時淮南堂たけの子をほらんとせしを秋までにはばして杖にきるも学行六樹園(他略)

朱樂菅江

本名山崎景貫、通稱郷助。幕府の士。寛政十年十二月歿す。(一七八八年)

あまのはら云

古今集、安倍仲鷹、天の原ふりさげ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも。

宿屋飯盛

本名石川雅望。通稱五郎兵衛。六樹園と號す。國文和歌に精し。宿屋を業とす。天保元年閏三月歿す。(一八四九年)

定家卿の年忌

五百五十年忌。大屋裏住。通稱久須美孫兵衛。萩の屋と號す。文化七年五月歿す。(一三九四年一四七〇年)

堪忍ぶくる縫ふべかりけれ

時鳥

つぶり光

ほととぎす自由自在にきくさとは

さか屋へ三里豆腐屋へ二里。

鶉

四方赤良

一つ捕り二つ捕りては焼いて食ふ

うづらなくなる深草の里。

本歌

夕なれば野辺の秋風身にそつづり返くる

千載

俊成



狂歌師の台作

月

朱樂菅江

あまのはら月すむ秋をまふたつに

ふりわけ見ればちやうど仲鷹。

歌人に贈る

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動きいだしてたまる物かは。

定家卿の年忌に

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま

経讀むもありただ啼くもあり。

述懐

鯛屋貞柳

つひにゆく道とはかねて業平の

業平のとてけふもくらしつ。

鯛屋貞柳
大阪の菓子商。
榎並氏、通稱善
八。享保二十年
八月歿す。(二三
一五年—二三九
五年)

一六 山庵雜記

一、

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、意は意無意の際にある

時、一鳥の聲を聽けば、忽としてわれ天涯

北に遊び、忽としてわれ塵界に落つるの感

あり。我に返りて後その聲を味へば、凡常

谷透村の野雀のみ。然るも我が得たる幽趣は地

に就けるものならず。ここに於いて私に



北村透谷

思ふ、感應我を主として他を主とせざるを。

二、

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於いてより

も、靜默瞑坐する時に於いて燦爛たる光明ある事多し。心中の文章

より心外の文章を綴るは善し。心外の文章を以て心中の文章を裝
はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往往にして
文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんより、心中の文章に甘
んじたればならん。

二二



ルイラーカ

身心を放ちて瞑然として天造に任せ
んか。身心を收めて凝然として寂定に歸
せんか。或は猖狂或は枯寂、猖狂は猖狂の
苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり。魚躍り

鳶舞ふを見れば、聊か心を無心の境に驅ることを得。雨そぼち風吹
きさそふにあひては、忽ち現身の心に還る。自然は我を弄するに似
て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

四、

魚躍り鳶舞ふ
詩經に「鳶飛
戾天、魚躍于
淵」。

他を議せんとする時尤も多くおのれの非を悟る。この頃激する所ありて生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し了りて靜に内省するに、人を難ずるの筆は同じくおのれを難ぜんとするに似たり。是非曲直輕輕しく判じ難し。如かず修練鍛磨して叨に他人の非を測らざることを努めんには、

五、

大いなる悔い改めは又一箇の大信仰なり、罪の罪たるを知らざるより大いなる罪はなし」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは、信仰に入る要諦なり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るるを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔い改めの生涯は即ち信仰の生涯なるか。

(北村透谷—透谷選集)

カーライル

英國の文學

者、歴史家。

エケンバラ大

Carlyle

學の講師たり

き(西曆一七

九五年—一八

八一年)

北村透谷

名は門太郎。雜

誌文學界を出せ

り。明治二十七

年五月歿す。(二

五二八年—二五

五四年)

一七 倫敦塔

倫敦塔

倫敦市中テム
ス河畔にある一
種の城郭。ウイ
リヤム一世の創
設。もと國王の
居城。中世には
國事犯罪人の牢
獄に用ゐられ、
現今は武器武裝
品等古遺物の陳
列場に充てら
る。

倫敦塔を、塔橋の上からテムス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら、物靜な日である。空は灰汁桶をかき交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂れ懸かつて居る。壁土を溶かし込んだやうに見ゆるテムスの流は、波も立てず、音もせず、無理やりに動いて居るかと思はれる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白き翼が、いつまでも同じ所に停つて居るやうである。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて櫂を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白い影がちらちらする。大方鷗であらう。見渡した處、すべての物が靜である。物憂げに見える、眠つて居る。皆

- 1 明喻(直喻)
- 2 漸層法
- 3 擬人法(活喻)
- 4 反覆法
- 5 暗喻(隱喻)
- 6 連鎖法

遊就館
 東京市麹町區九
 段阪上靖國神社
 境内にあり。新
 古の武器、その
 他軍事に關係あ
 る物品を陳列
 す。

過去の感じである。さうしてその中に、冷然と二十世紀を輕蔑するやうに立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のあらんかざりは我のみはかくあるべしといはぬばかりに立つて居る。その偉大なるには今更のやうに驚かれた。この建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸いもの、角張つたもの、色色の形状はあるが、いづれも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へるごとく見える。九段の遊就館を、石で造つて、二三十竝べて、さうしてそれを蟲眼鏡で覗いたら、或はこの塔にも似たるものが出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。二十世紀の倫敦が、わが心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が、幻のごとき過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ煙の、寢足らぬ夢の尾を曳くやう

に感ぜらるる。暫くすると、向岸から長い手を出して、余を引つ張るか、と怪しまれて來た。今まで佇立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなほなほ強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡りかけた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳せつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游するこの小鐵屑を吸収してしまつた。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向に一つの塔がある。これは丸形の石造で、石油タンクの状をなして、恰も巨人の門柱のごとく左右に屹立して居る。その中間を連ねて居る建物の下を潜つて向へ抜ける。中塔とはこの事である。少しゆくと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黒鐵の甲が、野をおほふ秋の陽炎のごとく見えて、敵遠くより寄すると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星くろき夜、壁上をあゆ

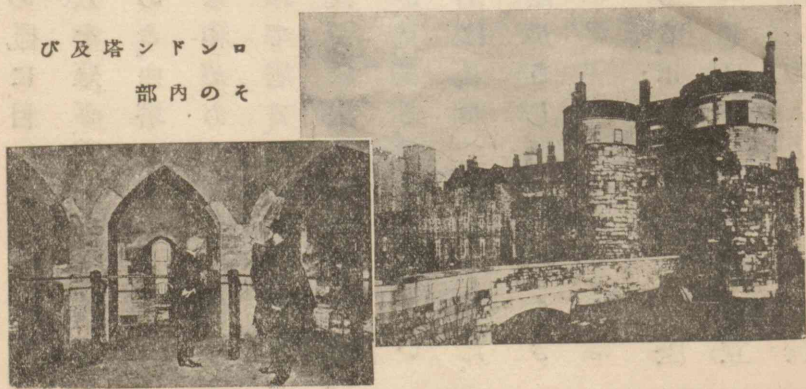
む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より
 闇に消ゆる時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なり
 とて、蟻のごとく塔下に押し寄せて、轟めき騒ぐ時も、亦塔上の鐘を
 鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。霜の朝、雪の夕べ、雨の日、風
 の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら、余が
 頭をあげて、葛に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として百年の響
 を收めて居る。

また少し行くと、右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が
 聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐しい。古來から塔中に生
 きながら葬られたる幾千の罪人は、みな舟からこの門まで護送せ
 られたのである。彼等が舟を捨てて一度この門を通過するや否や、
 娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかつた。テームスは彼等に取つ
 ての三途の川で、この門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の

アーチ Arch

浪に揺られて、この洞窟のごとく薄暗きア
 ーチの下まで漕ぎ付けられる。口を開けて
 鰭を吸ふ鯨の待ち構へて居るところまで
 来るや否や、キーと軋る音とともに、厚櫓の
 扉は彼等と浮世の光とを長へに隔てる。彼
 等はかくしてつひに宿命の鬼の餌食とな
 る。明日食はれるか、明後日食はれるか、或は
 また十年の後に食はれるか、鬼より外に知
 るものはない。この門に横付につく舟の中
 に坐して居る罪人の、途中の心はどんなで
 あつたらう。權がしわる時、雫が舟縁に滴る
 時、漕ぐ人の手の動く時、毎に、わが命を刻ま
 るるやうに思つたであらう。

ロンドン塔及びその内部



薔薇の亂
ヨーク家とラン
カスター家とが
王位を争ひたる
戦。前者は白薔
薇、後者は紅薔
薇を徽章とした
る故に名づく。

エドワード三世

Edward. III
世の子。佛國
の王位を争
ひ、西曆一三
三七年以來戰
を交へ、佛國
内の領地を擴
む。(一三一二
年—一三三七
年)

左へ折れて血塔の門に入る。今は昔、薔薇の亂に、目に餘る多くの
人を幽閉したのはこの塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を
潰し、乾鮭の如く屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけた
のも無理はない。アーチの下に交番のやうな箱があつて、その傍に
冑形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。塔の壁は、不規
則な石を疊み上げて厚く造つてあるから、表面は決して滑かでは
ない。處處に蔭がからんで居る。高い所に窓が見える。建物の大きい
せゐか、下から見ると甚だ小さい。鐵の格子がはまつて居るやうだ。
格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日蔭がさし込んで、きらき
らと反射する。

倫敦塔の歴史はポーション塔の歴史である。ポーション塔の歴
史は悲惨の歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立
にかかるこの三層塔の一階室に入るものは、その入るの瞬間に於

いて、百代の遺恨を結晶したる無數の記念を周囲の壁上に認むる
であらう。凡べての怨、凡べての憤、凡べての憂と悲しみとは、この怨
この憤、この憂と悲しみの極端より生ずる慰藉と共に、九十一種の
題辭となつて、今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷かなる鐵

筆に無情の壁を彫つて、

わが不運と定業とを天
地の間に刻みつけたる
人は、過去といふ底なし
穴に葬られて、空しき文
字のみいつまでも娑婆サハの



ロンドン塔番人

の光を見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれ
る。世に反語といふがある。白といつて黒を意味し、小と唱へて大を
思はしめる。凡べての反語のうち、自ら知らずして後世に残す反語

ほど猛烈なるは、又とあるまい。墓碣といひ、記念碑といひ、賞牌といひ、綬賞といひ、此等が存在するかぎりには、空しき物質にありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。我は去る、我を傳ふるものは残ると思ふは、去る我を傷ましむる媒介者の残る意にて、我その物の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未來の世まで反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てて貰ふまい。肉は焼き、骨は粉にして、西風の強く吹く日、大空に向つて撒き散らして貰はうなどと、入らざる取越苦勞をする。

題辭の書體は固より一樣でない。あるものは閑に任せて叮嚀に楷書を用ゐ、あるものは心急ぎてか、口惜しまぎれか、がりがりとして壁を搔いて擲り書に彫り付けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで、その中に古雅な文字をとどめ、或は楯の形を描いてその

内部に讀み難き句を残して居る。書體の異なるやうに、言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、伊太利語も、羅甸語もある。こんなものを書く人の心の中は、どの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に、何が苦しいといつても、所在のないほどの苦しみはない。意識の内容に變化のないほどの苦しみはない。使へる身體には目に見えぬ繩で縛られて、動きの取れぬほどの苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながらこの活動を抑へらるるの、生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたることを自覺するだけが、死よりも一層の苦痛である。この壁の周圍をかくまでに塗抹した人人は、皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるるかぎり、堪へらるるかぎりには、この苦痛と戦つた末、居ても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や、鋭き爪を利用して、無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩ら

し平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等が題せる一字一畫は、號泣涕淚、その他すべて自然の許すかぎりの排悶的手段を盡したる後、なほ飽く事を知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であらう。

又想像して見る。生まれて來た以上は、生きねばならぬ。死を怖るるといはず、只生きねばならぬ。生きねばならぬといふは耶蘇、孔子以前の道で、又耶蘇、孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。地獄に繋がれたる人も、亦この大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何にせば生き延びらるるであらうかとは、時時刻刻、彼等の胸裏に起る疑問であつた。一たびこの室に入るものは必ず死ぬ。生きて再び天を見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばな

らぬ。されど、古今に亙る大眞理は、彼等に誨へて生きよといふ。飽くまでも生きよといふ。彼等は己むを得ず、彼等の爪を磨いだ。尖れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一を書ける後、眞理は古のごとく生きよと囁く。飽くまでも生きよと囁く。彼等は剥がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二と書いた。斧の刃に、肉飛び骨擡ぐる明日を豫期した。彼等は冷かなる壁の上に、只一となり、二となり、線となり、字となつて生きんと願つた。壁の上に残る縦横の疵は、生を欲する執著の魂魄である。余が想像の絲をここまで手繰つて來た時、室内の冷氣が、一度に脊の毛穴から身の内に吹き込むやうな感じがして、覺えずぞつとした。

氣味が悪くなつたから、通り過ぎて先へ抜ける。銃眼のある角を出ると、滅茶滅茶に書き綴られた模様だか文字だか分らない中に、正しき畫で、小さく、ジェーンと書いてある。余は覺えずその前に立

ジェーン、グ
レー
英國王ヘンリ
一世の曾
孫。世に九日
女王と稱す。
(西曆一五三
七年—一五五
四年)

ち留まつた。英國の歴史を讀んだもので、ジェーン、グレーの名を知らぬ者はあるまい。又その薄命と無殘の最後とに同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは、義父と所天の野心との爲に、十八年の春秋を罪なくして惜氣もなく刑場に賣つた。蹂み躪られたる薔薇の蓋より、消え難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかしがらせる。余はジェーンの名の前に立ち留まつたざり動かない、といふよりむしろ暫く動けなかつた。(夏目漱石—倫敦塔)

寢殿の南面の御讀經所に僧共居竝みて物語などしてある程に、南面の山池などのいみじくめでたきを見て、山階寺の僧中算がいはいはく、あはれこの殿のさだちは異處には似ずかし」といひけるを、傍に木寺の基増といふ僧居て、これを聞くまに「奈良の法師こそなほ疎きものはあれ。木立とこそいへ、木立といふらむよなうしろめたなきの言や」といひて、爪をはたたとす。中算かく聞くまに、「あしく申してけり。然らば御前をば小寺の小僧とこそ申すべかりけれ」といひければ、ありとある僧ども皆これを聞きて音を放ちて夥しく笑ひけり。それより後小寺の小僧といふ異名はつきたるなりけれ。(今昔物語)

プラト
希臘の哲學
者。アテネの
人。ソクラテ
スの門人。西
曆前四二九年
—前三四七
年)

一八 眞の學人

プラトーがいつたやうに、人間の魂は常に本當のものを求めて止まない。幾たびか蹉跌しながら屈せず撓まず、本當のもの眞實なるものを喘ぎ求めるのである。かくして眞實なるものを欣求し、智慧を欣慕することによつて、學が生じて來るのである。本當のもの、眞實なるものを欣求するは、人間の衷情より發露するものであつて、何等か爲にするが如きものとは迥然として選を異にして居る。それ故に眞に學にいそしむ心は、富貴功名によつて動かされる心とは別である。富貴功名を輕蔑するといふのではないが、これを念頭に置かないのである。随つて貧乏もする。然しながら眞に參學究實の人に取つては、貧乏もさほど苦にはならぬ。それよりも、本當に欣求すべき價值があると思はれるものに向つて、邁進して倦むこ

學問に精進し眞實
を究める

とを知らないのである。學は學の爲に求むべきもので、決して何等かの爲にすべきものではない。道德に就いても亦同じ事がいはれる。道德は道德の爲にすべきもので、決して他のものの手段になつてはならない。愛國者は眞に愛國の熱情に驅られて愛國的行爲を爲すのであつて、これが自分の道德的修養の爲だと思へばその目的を誤る。その他の徳に於いても同様であつて、それが自己の修養になるなどと思へば失敗に歸するのである。

學に在つてもその通りであつて、本當のもの、眞正なるものを掴みたいといふ止むに止まれぬ衷心からの要求に驅られて出て來るのである。決して何等か他の目的の爲に用ゐられる手段ではない。他の目的の爲にするのは學の應用であつて、學そのものではない。例へば物理學を應用して器械を造るといふが如き場合は、初から利用を目標にして居るのである。決して學そのものではない。學

は自由なる精神の自發的行爲である。

既に學は本當のものを掴まうとする自由なる精神の自發的行爲なるが故に、學人と物識とは異なつて居る。物識は自發的に進んで研究するといふよりも、むしろ他人の研究したものを雜然と措集するものである。即ち知識の所有者である。これに反して、學人はどこまでも進んで欣求するものである。物識の器具は記憶力であり、學人の器具は思索力である。物識は既成の知識を貯へるものであり、學人は心を虚しうして知識を求めめるものである。兩者はその態度に於いて全く異なつて居る。程伊川曰はく「多聞識者、猶廣儲藥物也、知所用爲貴」と、又曰はく「學不貴博、貴於正而已」と。

されば讀書そのものは學では無い。固より讀書は先人の思想を知り、自己の趨向すべき所を知る爲に、必要缺くべからざるものであるが、その爲に讀書を以て直に學と同一視することは出来ない。

程伊川
名は頤、字は正
叔。宋の大儒。
大觀元年九月歿
す。西曆一〇三
三年—一〇七
年。

富貴も淫する能はず云云 孟子滕文公篇に出でたる語。

ましてや漫然として多讀するに於いては、精神の自發性を妨げ、思索を攪亂せしめる恐がある。これ古來屢ば多讀が戒められた所以である。然し選擇その宜しきを得て讀書に沈潜することは、學そのものの性質からして、善いことであり、貴いことである。これ昔から讀書を貴び、やがて學と同一視するやうにもなつた所以である。學はそれ自らが目的であつて、他の目的の手段方便では無い。他のもの手段ならば、學の價値は他のものに依存することになるであらうが、それ自らが目的であるとすれば、それ自身に價値を有するものである。そしてそれ自身に價値あるものは眞に價値あるもの、最も價値あるものである。眞に價値あるもの、最も價値あるものは尊嚴なものである。故にこの尊嚴なものに従事する學人は、やがて自ら持すること尊嚴ならざるを得ない。學人が富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる底の氣概を具へるに至るのは當然

得能文 文學博士。東京高等師範學校教授。

の事といはねばならぬ。然れどもこの氣概は一面に於いては謙虛であるべきである。眞の學人は常に眞理の前には謙虛でなければならぬ。學進まずして汲汲焉として毀譽を恤へ、榮辱を憂ふるが如きは眞の學人では無い。(得能文—淺人零語)

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を読むは長き旅路を行くが如し、面白からぬ所も多かるを經行きては又面白く目醒むる心地する。浦山にも到るなり。又足強き人は早く、弱きは行くこと遅きもよく似たりとぞいひける。をかしき譬なりかし。(本居宣長)
よろづよりも手はよく書かまほしき業なり。歌よみ、學問などする人は、殊に手あしくては心劣りのせらるるを、それ何かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさる事ながら、尙飽かずうち合はぬ心地するや、宜長いとつたなくて、常に筆執るたびにいとくち惜しういふかひなく覺ゆるを、人の乞ふままに面なく短冊一ひらなど書き出でて見るにも、我ながらにいと片はに見苦しう頑なるを、人いかに見るらむと恥しく胸いたくて、若かりしほどになどて手習はせざりけむといみじう悔しくなむ。(同)

一九 長柄堤の訣別

淨「晨鷄再び鳴いて残月薄く征馬（征馬）しきりにいなないて行人出づ。はや別れ行く横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消し行くいな（明）のめの長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、ありあけ凄き淀川水。

とよき頃に道具幕を切つて落すと長柄堤の體平舞臺上手よき處に、市正床几に腰をかけ、その後に乗馬に馬丁二人付き添ひ控へ居り、下手よき處に主膳正つくばひ、その下手うしろに家來大勢ひかへ居る。

市「討手來たらざれば（自言）自裁もかなはず、人人の諫にしたがひ茨木へ落去とは決せしもの、お家の後事を長門守に託しおきたく、先刻ひそかに三右衛門を木村が邸に走らせたり、我はこれにて返事を待たん。御身は我にかはり手勢を（指揮）差配し、一足先へ參らる

長柄堤 今の大阪府西成郡豐崎町。
市正 片桐且元。豊臣秀頼の傳。元和元年五月卒す。(二二二一六年—二二七五年)
主膳正 片桐貞隆。且元の弟。寛永四年十月卒す。(二二二〇年—二二八七年)
茨木 大阪府三島郡茨木町。
長門守 木村重成。重茲の子。元和元年五月戦死す。(二二二五年—二二七五年)

べし。

主「仰ではござりますれど、油斷ならざる折柄、只御一人此處にござあらんは心元なし。

市「いやそれはいらぬ遠慮、われらが警護は、豫て清藏らに申し含めおいたれば氣づかひなし。(と向を見て)おお、あの人影は。

淨「詞のうちにはるかに足音。

とこの時、今村三右衛門揚幕より急足にて出で來たり、すぐ本舞臺へ來て、

今「ハッ申し上げます。長門様には追つつけこれへ。

市「大儀大儀、然らば弟、御身は先へ參られよ。其方も共に。

淨「顔見合はせて是非なくも、主膳を先に一同は、心残して行き

過ぐる。

（表情的動作）

と今村へこなし、これにて主膳正は一同へこなしあつて、市正に會釋し、皆皆を引き連れ、二重に上り上手へ入る。

淨「あとには何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤のありあけがた、見る目もくらしをち方に、朧朧とあらはるる、名に大阪の四衢八街、悄然として一むね高く聳えしは、

とこの文句の間に、市正は馬に跨りて二重に上り向を見ることあり。

市

「おお、あれこそはお天守ぢやなあ、

と向を見てよろしく思入。

南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮あるものには堅節なく、義勇を存する者は才略乏しく、阿附黨同して相闘げば、大政所の御方さへ、當家をよそに見そなはし、浮世離れし御有様、唇齒已に亡ぶ、今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、城は堅固なま淨「いひかけて聲くもらせ、恠へず馬より飛び下り、

南山不落

詩の小雅「如南山之壽、不騫不崩。」

加藤肥州

加藤肥後守清

正。慶長十六年

六月卒す。(二二

二年—二二七

〇年)

大政所

秀吉の正室、淺

野氏。高臺院と

稱す。寛永元年

九月薨す。(二二

〇九年—二二八

四年)

これ然しながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の良に懸かつて、御遺命にもとり奉るけふの仕合せ、不忠ともいひがひなしとも思し召されん。それを思へばこの腸はちぎるるばかり、償ひがたき不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お許しなされて下さりませ。

淨「人目なければやや暫し、不覺の涙に暮れけるが、ややあつて心づき、

我ながら不覺の至り、大罪の御詫よりも、さし懸かるお家の安危、

……長門守にはいかにせしか。ハテ心元なき。

といひつつ、馬を二重上手物かけへ牽きゆきて繋ぐ。

淨「すかし眺むる折こそあれ、殘霧つんざき一さんに、馳せ來る

木村長門守、

と向揚幕より長門守馬に乗りて馳せ出で來たり、本舞臺の方をすかし見て、

木 「市正どのに候な。

市 「長門どの待ちかねしぞ。

淨「いふ間に驅けよる轡づら、右手におり立ち顔見合はせ、詞はなくてそぞろにも、まづ袖ぬるる朝露や。

と木村馬よりおり立ちながら、且元と顔見合はせ、暫くは無言にて落涙のこなし、やがて下手の柳の木へ馬をつなぎて、舞臺の中央に進み市正と向ひ合ふ。

木 「もはや豊臣の御社稷も、いよいよ末となつたるか。棟梁と頼む貴殿まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せられんとは、と愁の思入ありて、市正は傍の木に重成はよろしくその下手に踞みて、それがし圖らぬ事よりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。つづいて貴殿に御討手と、昨朝承はり大いに驚き、すぐにお表へ参入すれば、城内議論涌くが如く、織田入道どの日頃に似げなく、激論の

織田入道
名は信雄、法名常眞。信長の子。寛永七年薨す。
(二二一八年—二二九〇年)

大野渡邊
大野道大治長父子と渡邊糺。

末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、あとは亂脈無法の評定。御母公の威を笠に著る、大野渡邊等が我意暴慢、この上は彼等を一刀に斬つて捨て、腹搔き切らんと再びまで、刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりしいひがひなさ。

淨「悔むを且元おしなだめ、いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢ば申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を捨つるは、大忠臣の所爲にあらじ。大切なるはお家の後事某退去の事關東に聞えなば、大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏



長柄堤の背景と大阪城

九度山

和歌山縣伊都郡。高野山の北谷の村。

眞田安房守

名は昌幸。關原役後、九度山に隱棲し、慶長十三年六月歿す。(二二〇四年—二二六八年)

左衛門佐幸村

秀頼の名に應じて大坂に入り、夏の陣に戦死す。(二二〇年—二二七五年)

に籠城の計畫こそ肝要なれ。

木 「して籠城の計畫とは、何をもつて先とすべきか。

市 「されば、今御城に兵糧金銀は乏しからず、まつた猛將勇卒にも事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置いたり。

木 「してその智謀の將と申すは、

市 「今九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、先年お身方となし置いたり。合戦の驅引は一切かの仁に任せられよ。

木 「して又籠城となつたる曉敵を防がん手配は、

市 「その義も豫て地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山山より、材木あまた切り出させ、お船入に積み置いたり。まつた湊口の御藏には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。

籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘あるべし。

木 「これに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御費用嵩むといへども、猶そこばくの餘財あり。

市 「甲冑兵具も乏しからず。

木 「城は名におふ南山不落。

市 「忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立て籠り、偏に君家を守護するときは、

木 「たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州

の兵を盡し、四方八方より攻め寄せるとも……。

市 「なかなか三年四年が程には、攻め落さん事難かるべし。

木 「まつた若年には候へども、いよいよ軍始まりなば、我また一方を承はり、速見御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命は元より鴻毛の吹きひるがへさん。白旗は、祖先佐佐木が四つ目結

君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利慾に集まる關東勢、何退くるに難かるべきや。この上は仰に隨ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配せん。御心安かれ市正どの。

市 「ほほ頼もし、頼もし。只大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ……とは言ひながら往時に照らし、成り行く末を鑑みれば……」

木 「御母公の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市 「上御發明に渡らせらるれど……」

木 「讒佞これを蔽ふが故……」

市 「地の利はあれども人の和なく。」

木 「故太閤が御威武に、をのき震ひうち伏しし、六十餘州の民草も……」

市 「天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、いつしかなびくも……」

社鼠
鼠の社に託するや、焼くべからず。社を敗らんことを恐る。以て君側の奸に喩ふ。説苑に見えたる故事。

世の有様。

木 「いかなればかくまでに、御運傾く西天の……」

とこのうち、あちこちにて鶏の聲。市正落ちかかつてゐる月を見やりて、

市 「有明の影うすれつつ……」

木 「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだけかけは……」

市 「新日東天に昇るといふ。」

木 「世の成行の……」

兩人 「影なるか。」

「淨」是非もなき世の有様と、暫しは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。

とこの時鐘の音聞ゆる。夜明の心、なほ處處に鶏の聲。

市 「後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ残すこともなし。」

木 「して貴殿にはこれよりして……」

市 「居城茨木へ一まづ立ち越え……」

木 「と仰あるは受け取り難し。もしやこれが今生の……」

市 「ああ、いや、いさぎよき最後をだに遂ぐべき機會を失ひし市正が命の拙さ。御詫の名こそ立ため、つぐなひ難き身の大罪、この身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中、いや、なに、心ばかりはこの後とても、君の御影に付き添ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなんその時には、」

木 「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思出奉公をさめ、關東勢が真中に、縦横無盡の血戦なし、華華しく討死なさん。市 「おお勇まし、いさぎよし。某ながらへ世にあらば、その目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。なほ再會は黄泉にて、」

木 「さやうござらば市正どの。」
市 「随分堅固で……」

木 「貴殿にも……」

淨「惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば黄蘗は蜜にや似たるらん。駒引きよせて式退や、見返りがちに乗り移る。秋さび月毛乗る人の、心やいかに片手綱。」

とこのうち、木村は柳の木に立ち寄りて馬の綱を解く。市正は鐵扇を開きて二重の上手へ合圖をする。と木村清藏二重の上手より、以前の馬を牽きて出で平舞臺へ下りる。これにて市正も木村も馬に乗る。

市 「さらば。」

木 「さらば。」

淨「と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろおぼろ。嘶く駒の聲はして、この世に残す面影は、又見ぬ影とぞなりにける。とこの内市正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互に見返ることよろしく幕。(坪内逍遙—桐一葉)

坪内逍遙
文學博士。早稲
田大學名譽教
授。明治大正文
壇の大功勞者。
名は雄藏。愛知
縣の人。安政六
年六月生まる。
著譯頗る多し。

○こは元弘元年七月、藤原俊基の東下の條なり。

落花の雪に

新古今集、俊成、「又や見む交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙」。

紅葉の錦

拾遺集、公任、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦著ぬ人ぞなき」。

世をうねの野に

古今集、詠者不詳、「近江より朝立ちくればうねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は」。

時雨もいたくもる山

古今集、貫之、「白露も時雨もいたくもる山は」。

下葉残らず色づきにけり」。

潮干に今や

新古今集、秀能、「さよ千鳥聲こそ近くなるみ漏傾く月に汐やみつらむ」。

重衡中將

左近衛中將。清盛の子。壽永三年一谷の戦に捕へられ、翌年不津川に斬らる。(一八一七年—一八四五年)

二〇 落花の雪

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻がり、紅葉の錦を著て歸る。嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寝となれば物うきに、恩愛のちぎり浅からぬ、わが古里の妻子をば、ゆくへも知らずおもひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。憂きをばとめぬあふ阪の、關の清水に袖沾れて、末は山路をうち出の濱沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身を憂き舟のうき沈み、駒もとどろと踏みならず、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜のま

にも、おいその森の下草に、駒をとどめて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほ漏るものは秋の雨、いつかわが身のをはりなる、熱田の八劍伏し拜み、潮干に今やなるみ漏、かたむく月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀とゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。元暦元年の頃か、とよ、重衡中將の東夷の爲に囚れて、この宿に著き給ひしに、東路の埴生の小屋のいぶせきに、ふる里いかに戀しかるらむ。と、宿の主人が詠みたりし、その古のあはれまでも、思ひのこさぬ涙



(圖挿記平太板古) 下 東 基 俊

なり。

旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天

龍川をうち渡り、さやの中山越え行け

ば、白雲道を埋み來て、そのとも知らぬ

夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法

師が「命なりけり」と詠じつつ、再び越え

しあともまでも、羨ましくぞ思はれける。

隙ゆく駒の足はやみ、日既に亭午にの

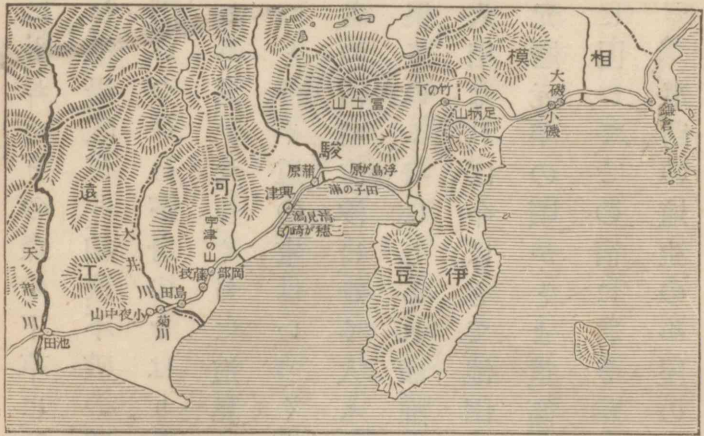
ばれば、乾飯進らするほどとて、輿を庭

前に昇きとどむ。轆を敲きて警固の武

士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川

と申すなりと答へければ、承久の合戦

の時、院宣書きたりし咎によりて、光親



小島法師
吉野時代の百撰
記した軍記物
文ははやく虚飾
多く内容正信も
あぜ
命なりけり
新古今集、西行、
「年たけてまた
越ゆべしと思ひ
さや命なりけり
さやの中山」。

光親卿

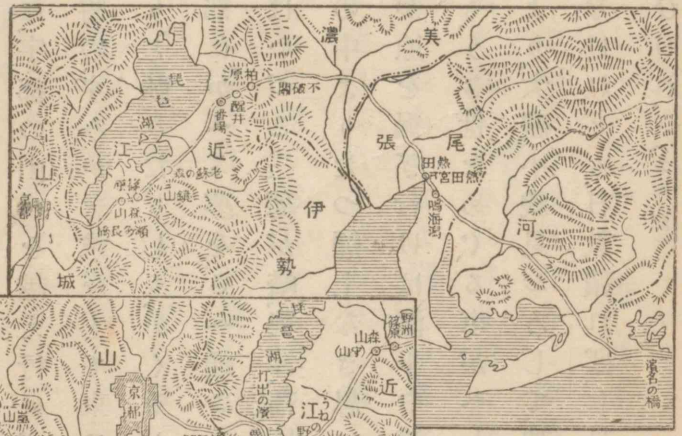
藤原氏。光親の
子。權中納言に
任じ、才學あり。
承久の役、院宣
を作り義時の罪
を鳴らす。事破
れて執へられ、
駿河加古阪に斬
らる。(一一八八
一年)

南陽縣の句

藤原宗行の作。
菊水のことは、
風俗通に「南陽
縣有甘谷、谷
中水甘美、上有
大菊、落、水從
山流下、得、其
滋液、谷中人家、
飲、此水、上壽百
二三十、其中、百
餘歲、七八十者
則爲天」。

龜山殿

京都府葛野郡嵯
峨にありし龜山
の離宮。



大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐
の山の花盛、龍頭鷓首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今

卿關東へ召し下されしが、この宿にて
誅せられし時、昔南陽縣、菊水、汲下流而
延齡、今東海道、菊川、宿、西岸而終命、と書
きたりし遠き昔の筆のあと、今は
わが身の上になり、哀やいとど増
りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱
にぞ書かれける。

古もかかる

ためしを菊

川のおなじ流に

身をや沈めむ。

潮見 夢もゆらさむ波をせせり

夢にも人に
伊勢物語に、上
句「駿河なるう
つ山のべのうつ
つにもしとあり。

上なき思
新古今集、家隆、
「富士の根の煙
はなほも立ちの
ぼる上なきもの
は思なりけり」。

は再び見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。
島田藤枝にかかりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮
に、宇都の山べを越え行けば、蔦葛いと繁りて道もなし。昔業平の中
將のすみかを求むとて、東の方へ下りて、夢にも人にあはぬなりけ
りと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、
都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、むかひ
はいづこ三穂が崎、興津蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪
の中よりたつ煙、上なき思にくらべつつ、明くる霞に松見えて、浮島
が原を過ぎ行けば、潮干や淺き舟浮けて、下り立つ田子のみづから
も、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげ
より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもは
なければども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給
ひけれ。(太平記)
七月十一日

二一 夢應の鯉魚

延長
醍醐天皇の御
代。
三井寺
園城寺のこと。
滋賀縣滋賀郡。
天台宗の大寺。

感應の心に感ひ答へよこと
① 二物互に感ひ入ること
② 度人の神佛に通ずること
③ 磁石の他物に作用してそれと起ること

昔延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて、
名を世に許されけり。常に描くところ、佛像山水花鳥を事とせず、寺
務の暇ある日は湖に小舟を泛べて、綱引き、釣する白、水郎に錢を與
へ、獲たる魚を元の江に放ちて、その魚の遊躍を見ては描きける程
に、年を経て詳しきに至りけり。
或時は繪に心を凝らして眠をさそへば、夢の裏に江に入りて大
小の魚と俱に遊ぶ。覺むれば即ち見つるまを描きて壁に貼し、自
ら呼びて夢應の鯉魚と名付れたり。その繪の妙なるを愛でて乞ひ
要むるもの前後を争へば、只花鳥山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の
繪はあながちに惜しみて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮けきを喰
ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必しも與へじと。その繪と俳諧と共に

尺談洒落

天下に聞えけり。

一とせ病に罹りて、七日を経て、忽に眼を閉ぢ息絶えて空しくなりぬ。徒弟、友どち集まりて歎き惜しみけるが、ただ心頭の邊の少し暖かなるにぞ、若しやと居めぐりて守りつつも、三日を經にけるに、手足すこし動き出づるやうになりしが、忽ち長嘘を吐きて眼をひらき、醒めたるが如くに起き上りて、人人に向ひ、われ人事を忘れて既に久しき日をか過しにけむ。衆弟等いふ、師三日前に息絶え給ひぬ。寺中の人人をはじめ、日頃睦まじく語り給ふ殿原も詣で給ひて、葬の事をもはかり給ひぬれど、ただ師が心頭の暖かなるを見て、柩にも藏めでかく守り侍りけるに、今や蘇り給ふにつきて、かしこくも物せざりしよと、怡びあへり。興義點頭きていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣でて申さむは、法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み鮮けき鱧を作らしめ給ふ。暫く宴を罷めて寺に

詣でさせ給へ。稀有の物語聞えまゐらせむ」とて、彼の人人のある形を見よ。我が詞に露たがはじ」といふ。使異しみながら彼の館に往きて、その由をいひ入れて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みゐたる。師が詞のたがはぬを奇とす。彼の館の人人、この事を聞いて大いに



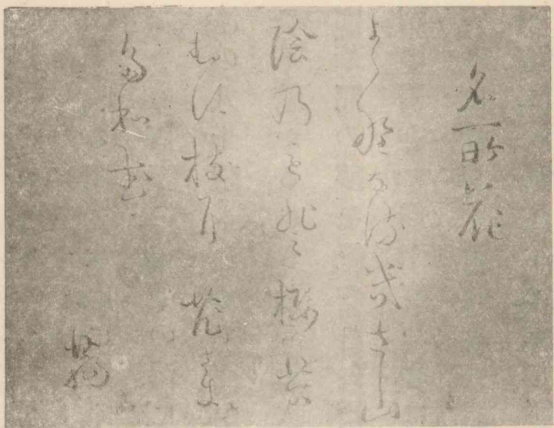
上 田秋成(木像)

異しみ、まづ箸を止めて、十郎、掃守をも召し具して寺に到る。

興義枕をあげて、路次の勞をねぎらへば、助も蘇生の賀を述べ、興義まづ問ひていふ、君試みに我がいふことを聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へ給ふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにして知らせ給ふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の處に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃

の實の大きいなるを啗ひつつ奔の手段を見る。漁父が大魚を携へ來たるを喜びて、高坏たかばいに盛りたる桃を與へ、又盃をたまうて三獻飲ましめ給ふ。庖人ほうちうじんしたり顔に魚を取り出でて鱠にせしまで、法師がいふところ違はでぞあるらめといふに、助の人人この事を聞きて、或は異しみ或は心地惑ひて、かく詳あきらなる言の由を頻に尋ぬるに、興義語りていふ、われこの頃病に苦しみて堪へ難きあまり、その死したるをも知らず、熱き心地少し醒さむものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやや忘れたるやうにて、籠の鳥の雲居に歸る心地す。山となく、里となく、行ゆぎ行きて又江の畔に出づ。湖水の碧あざなるを見るより、現まなき心に浴あみ遊あびなむとて、そこに衣を脱ぎ捨てて、身を跳らして深きに飛び入りつつ、彼此を遊あぎまはるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、欲ほふにまかせて戯れけり。今思へば愚なる夢心地なりき。されども人の水に浮ぶは魚の快きには若たかず。こ

名所花
よし野なるき
さ山陰のもと
櫻苔むす枝に
花さきたわむ
無腸



こにて又魚の遊をうらやむ心起りぬ。傍に一つの大魚ありていふ、師の願ふこといと易し。待たせ給へとて、杓はらの底に去ると見しに、しばしして、冠装束かんざうそくしたる人の、前の大魚に跨がりて、數多の鼈魚かめいしを牽ひゐて浮うび上あきたり。我に向ひていふ、海若かいじやくの詔あり。田老僧かねて放生の功德多し。いま江に秋入りて魚の遊躍を願ふ。權かりに金鯉が服成を授けて水府みづのふの樂がくしみをせさせ給ふ。筆ふでただ餌の香しきに味あじまされて、釣つりの絲いとにかかり身を亡ふこと勿れといひて、去りて見えぬ。不思議のあまり、に、おのが身を願みれば、いつのまにか鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。異しとも思はで、尾を振り、鰭を動かして心のままに逍遙

長等の山 大津市の西方に在り。
 志賀の大灣 今の大津より草津に至る湖岸の曲。
 比良の山 滋賀郡大戸、小松の二村の西に横互し、湖を隔てて伊吹山に對す。
 堅田 滋賀郡堅田村。
 鏡の山 蒲生郡鏡山村。
 沖つ島山 今は沖の島と呼ぶ。蒲生郡に屬す。島内に奥津島神社あり。
 竹生島 淺井郡竹生村に屬す。島内に都久夫須磨神社、

す。
 まづ長等の山（伊吹山下）おろし立ちある浪に身をのせて、志賀の大灣の汀に遊べば、かち人の裳の裾濡らすゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火（伊吹山）によるぞ現なき、ぬば玉の夜中の渦にやどる月は鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなく面白う、沖つ島山、竹生島波にうつろふ朱の垣こそ驚かるれ、さしも伊吹の山風に、やがて朝の漁船も漕ぎ出づれば、葦間の夢を覺され、矢橋（伊吹山）のわたりする人の水馴棹を逃れては、瀬田の橋守に幾十度か逐はれぬ、日暖かなれば浮び風荒き時は千尋の底に遊ぶ。

俄にも飢ゑて食欲しげなるに、彼此にあさり得ずして狂ひゆくほどに、忽ち文四が釣を垂るるにあふ。その餌甚だ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり、しばし食を求め得ずとも、な

竹生島辨天堂、竹生島觀音堂あり。
 伊吹の山 滋賀、岐阜兩縣の界に在り。
 矢橋 栗太郡老上村。
 瀬田の橋 栗太郡瀬田村大字橋本の西にあり。

どもあさましく魚の餌を吞むべきとてそこを去る。飢ますます甚しければ、重ねて思ふに、今は堪へ難し、たとひこの餌を吞むとも嗚呼に捕られむやは、素より彼は相識るものなれば、何の憚かあらむとて、遂に餌を吞む。文四はやく絲を收めて、我を捕ふ。「こはいかにするぞ」と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押し入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奔して遊ばせ給ふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來つる大魚を見て、人人大いにめでさせ給ふ。われその時人人に向ひ、聲を張りあげて、「かたがた等は興義を忘れ給ふか。宥させ給へ。寺に歸させ給へ」と、しきりに叫びぬれど、人人知らぬさまにもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。庖人なるもの、まづ我が兩眼を左手の指にて強く捕へ、右手に礪ぎ澄ませる刀を執りて、俎盤にのぼせ、既に切るべかりける時、我苦しさの餘に大聲をあげて、

「佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ」と哭きさげびぬれど聞き入れず。終に切らるると覺えて夢醒めたり」と語る。

人人大いに感で異し、師が物語につきて思ふに、その度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出だすことなし。かかる事まのあたりに見しこそ、いと不思議なれ」とて、從者を家に走らしめて、残れる鱸を湖に捨てさせけり。

興義これより病癒えて杳の後、天年をもて死りけり。その終焉に臨みて、描くところの鯉魚數枚をとりて湖に散らせば、描ける魚、紙絹を離れて水に遊戯す。ここをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙を傳へて、時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を描けるに、生ける鶏この繪を見て蹴たるよし、古き物語に載せたり。(上田秋成——雨月物語)

閑院の殿
京都二條の南、
西洞院の西に在
りき。
上田秋成
國學者。大阪の
人。無勝子又稱
居と號す。文化
七年十一月歿
す。(二三九三年
—二四七〇年)

二二 我等の祖先の生活

我等の祖先の生活について吾吾の感ずる所のものは、ただ偏に活きんとする人間の力である。あらゆる物を自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等の身に纏ふべき衣服の材料を彼等に供給する蠶も、彼等の生命を繋ぐべき稻も粟も小豆も麥も大豆も、皆悉く彼等と同じ人間の肉體から分化して出たものと觀た。それ程までに彼等は人間の生活を擴大して居た。彼等の眼中には人間の運命の最後は死でなくして、發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が「汝が國の人草、一日に千頭絞り殺さむ」といつたのに對して、生の國にあ

る伊邪那岐命は、汝しか爲給はば、吾はや、一日に千五百産屋立ててむ」と答へた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に熱烈なる生の力が飽くまでも死の力と戦つて、それに打ち勝たう、それを脱出しようとする悶えてゐたことは、最も注目すべきことである。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむやうな態度は、少しも見えない。死に對して悲しみ歎き、果は諦めるやうな事は、我等の祖先にはなかつた。彼等の死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉して死に對する憎惡の念となり、挑戦の力となつた。彼等は死といふ事實に對して諦める代りに戦つた。彼等は如何なる境遇にあつても、常に生きんことを欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生と變へなければ止まなかつた。

次に我等祖先の神は、人間の生活力の象徴であつて、實際吾等の祖先ぐらゐ、何にでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。さう

かといつて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、又野蠻な自然物崇拜でもない。神は凡べて人間であつた。威力を有する人間が即ち神であつた。隨つて、所謂敬神の念には救濟を祈るやうな分子はなかつた。敬神はただ肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶對的の主權者とは思はなかつた。敬神は強大なる人格に對する讚美と、自己の生命の源に對する讚美とに外ならなかつた。祈念は又常に幸福本位であつた。我を捨てて神に縋るといふよりは、私の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならなかつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大された象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふ所に強固な基礎を有する我等の祖先の敬神觀念は、他面に於いてその念力に逆ふ所の者の衰滅を信じた。吾等は生活の發展といふ事を偏に神の意志と觀た當時の宗教的思想

に深い興味を覚える。
 吾吾の祖先の生活に對する心持と、佛儒二教渡來以後の文學の調子とは、著しく違つて居る。吾吾はこの二つの調子の相違に、將來に於ける吾吾日本民族の發展上、深く心をひそむべき根本問題があるやうに思ふのである。
 外に向つて最近著しい國家的發展をなし來たつたわが日本民族は、內的方面にも亦最近著しく革新的經路を歩みつつある。無論それには外國思想の影響が多分に^{多量に}あるのだが、然し大體から見て、從來の消極的思想に對する、新なる積極的思想の勃興と見て差支へなからう。長い年月の間續いて來た吾吾民族の消極的生活に對する新しき生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期^{過渡期}、それが現今のわが文藝界を中心とした思潮^{思想の潮流}の状態ではなからうか。かう考へて見て、更に上古に於ける吾吾祖先の積極的生活の空氣を味つ

て見ると、吾吾は一種堪へ難い憧憬の念が湧くのを感じる。

(相馬御風——黎明期の文學)

相馬御風
 文學者。名は昌
 治。明治十六年
 七月生まる。新
 潟縣の人。

群鴉星を負うて茂林に歸り、樵夫月を戴きて家路に急ぐ。かごとがま
 しき蟲の音に、葉末の露ぞ濃やかなる。既に人迹絶えければ、爲朝は古
 りたる木の下に立ち寄りて衣服を更め、御墓に詣でて見れば、千草は
 一叢の煙を残して玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照らして荆棘路を
 塞げり。百磯城や紫の袖を連れ、朝政聞しめしける十善の君として、宿
 世の惡報は免れ給はず。青塚苔滑にして白楊風に戦ぎ、旅魂幽靈今何
 處にかさまよひ給ふやらんげに人間の富貴は夢の中なる快樂にて、
 妻子珍寶及び王位も、身死しては伴侶ならず。さればとて三界の火宅
 を出でて、永く九品の淨刹に至らんこと、猶容易にあらざめり。此を見
 彼を思ふにも、我が身の果は數ならで、そぞろに涙ぞ先立ちける。

(曲亭馬琴)

ソクラテス
(西曆前四
七〇年—前
三九九年)

跋提河
源をニポールに
發し、拘屍那揭
羅城の南方を流
る。

一三三 世界の四聖 その一

生まれて一代の宗師大テとなり、死して百世の儀表後まで手本となる。聖人にあ
らば誰かこれを能くせん。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼
びて世界の四聖と稱す。宜もつとなるかな。

釋迦は西曆紀元前およそ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生
まれき。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名を悉達多シッタタといへり。釋迦
は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。そ
の身一國の太子に生まれけれども、夙ソツに思を人生の問題に潜め、二
十九の歳妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること
六年、終に人生の奧義を究め、無上の正覺マウジョウに徹底せり。爾來五十餘年
の間、北天竺の各地に巡錫フンシキして教化を布き、年八十餘にして跋提河
の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。けだし、釋

師命
梵語南無の譯
語。又、頂禮、
稽首などいふ。

木鐸
論語に、「天將
以夫子爲木
鐸」。註に、「木
鐸、金口木舌、施
政教の時、所振
以警衆者也」。

齊侯
景公なり。



釋 迦

迦の當時印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を欽
びて人世の疑問に適切ならず。偏オホに幽玄なる談理と慘澹たる苦行
とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふ所は、畢
竟名目上の優劣のみ。いまだ一世の元元元々をして歸命の大道に就か
しむるに足らず。釋迦この間に生まれ、
その洪大なる慈悲と無邊なる智慧と
を以て一世の木鐸指導者となり、民をしてそ
の歸依する所を知らしめたり。

孔子は名を丘といふ。孔子はその尊
稱なり。今を距る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生まれき。幼より
學を好み、禮を習へり。壯年の頃、魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へ
て夙ソツに令聞あり、學徳愈進めり。魯の定公の時にいたり、擢トクでられて
大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊

高遠な
はなれて
高遠な
高遠な

嗚呼わが道云

史記に、「及三四狩見麟曰、吾道窮矣、喟然歎曰、莫知我、子貢曰、何爲莫知夫子、子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎、君子病沒世、世而名不稱、吾道不行矣、吾何以見於後世。」

侯魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、その君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、権力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、いまだ曾てこの時の如きはあらざりき。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべしかく、の如くにして四方を漂浪すること十三年。時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。ここにおいて已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼わが道遂に窮す。世遂にわれを知る者なきか」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子

を知る者なからんと。孔子對へていはく、天を怨みず人を尤めず。下學してしかして上達す。われを知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病ふ。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えんと。幾ばくもなくして歿せり。時に年七十三。



孔子 (鳥田墨仙筆)

ソクラテスは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。その生まれたるはおよそ紀元前四百七十年

彫刻師

名をソイフロニスロスといふ。

詭辯學派

西曆前第五世紀の後半において、一時希臘に勢力ありし一派の學者の總稱。その始祖をプロイタゴラスといふ。

の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人あまりに時を隔てずして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争にとどまり、道德は空文の上のみ尙ばれたり。その状なほ釋迦當時

字收

の印度の如く、人生社會の實際に關しては殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ理を談じ、諄諄として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨特の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに喬木は風に折らるる喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀にいはいはく、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教をはじめ、以て人心を惑亂せり。よろしく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語語百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、いはく「命のみ」と。その獄中にあるや、

アスクレピオス神
Asklepios
醫術の神。



毒杯を受くるソクラテス

常にその門弟子を集めて生死、靈魂、未來のことを説き、人の脱獄を勸むるに對しては、輒ち答へてはいはく、「予はただ正義に導かれんのみ。死はた何爲るものぞ。人世の幸福は靈魂のうへにあるを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿せり。まさに歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテスはいはく、「爾一鷄を以てアスクレピオスの神にささげよ」と。けだし曾て病みし時、平癒を祈りて謝をいたすことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくのごとくにして逝きぬ。年七

十.

基督は本名を耶蘇といふ。基督は膏灌がれたる者といふ義にし

猶太 Judaea ヨセフ Joseph ヨハネ Johane
西曆前三十年代の人。

て、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生まれき。その生後四年を以て西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといへり。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、もろもろの迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。そもその當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異^{さいい}孝^{こう}に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜してますます放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。茲において、一世の人心は缺焉^{けつゐん}として偉人の出現してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生まれ、自ら救世の使命を負へる「神の子」と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學

者、官吏等これを喜ばず、以て猥に新法、異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督をとらへて磔刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然^{げんぜん}として騒がず、靜に祈りていはく、「神よ、かれ等を許せ。かれ等は、その爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、



基督 (筆仙墨田島)

路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、わが爲に哭くと勿れ。唯おのれと

おのれの子との爲に哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年の短き生涯にて十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘めつ。基督教即ちこれなり。

轆軻
廣韻に、「轆軻、
不遇也。車行不
利曰轆軻。故
人不_レ得_レ志亦
謂_レ轆軻。」

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内釋迦を除いては、いづれも轆軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりといふべし。然れども、これらの人人の志しし所は天下、後世にあり。現世の禍福と一身の安堵とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却りて、わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えんと嗟歎せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して、いはく、正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民

の迷を覺まさざるべからず」と。基督はおのれを罪に陥れたる者の爲に神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

二四 世界の四聖 その二

四聖はその生まれたる處と時とを異にす。故にその教理にもまた多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば、左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生死老病いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執著するにあり。故に吾人は我の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は身を修め家を齊へ天下を治むるにあり。而して身を

身を修め云云
大學に、「古之
欲_レ明明_レ於天
下_レ者、先_レ治_レ其
國、欲_レ治_レ其國
者、先_レ齊_レ其家、
欲_レ齊_レ其家者、
先_レ修_レ其身、欲_レ
先_レ修_レ其身者、
先_レ正_レ其心、欲_レ
正_レ其心者、先_レ
誠_レ其意。」

孝は百行の本なり
古文孝經の序に見ゆ。

修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要ここにおいてかあり。既に教育を受けて身既に修らば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治るべく、國治らば天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。
ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。おもへらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の真正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義おのづからその中にあり。正義は靈魂の満足なり。靈魂は肉體と異なりて不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の

山上の垂訓
新約全書、馬太傳に出づ。基督、猶太の祝福の山にて、不滅の教訓を垂る。

利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中にあり」と。

基督の教は「愛の教なり」と稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、
「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵する勿れ。人もし汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の鄰人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんが爲に義をその前に行ふ勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむる勿れ。偽善者の行に倣ふ勿れ。隠れたるを鑒み給ふ神はあ

らには報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら何ぞおのれが目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪（まぶ）に至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗚呼いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得る者の少きぞ。およそこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し。

と。基督教の精髓は、後世の人さまざまの色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。

かくの如きは四聖の傳記および教義の大要なり。嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尚凜凜として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念（道に精進しよと云ふ）を養ひ、その

安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる、それ何を以てかこれに比せん。

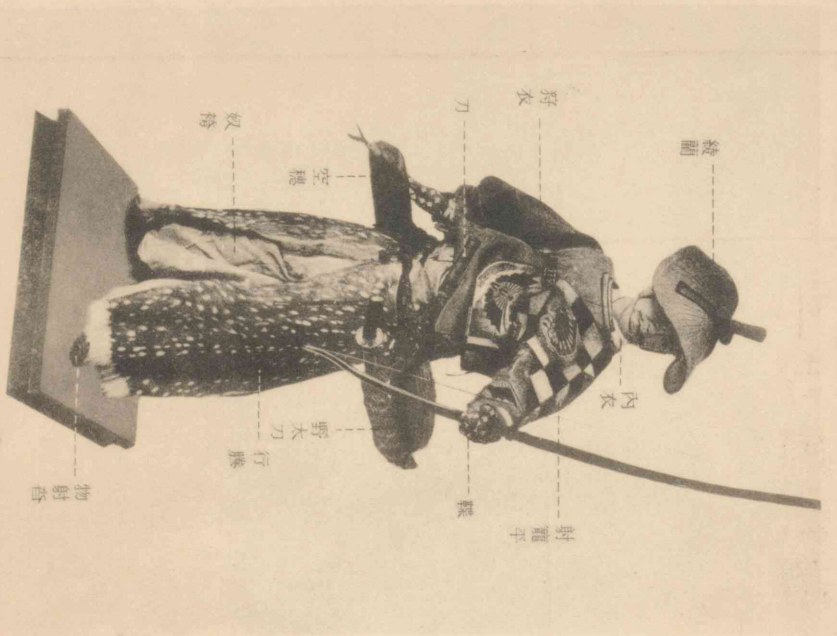
（高山樗牛——樗牛全集）

信ぜらるるもの、即ち宗教的對象の最も原始的なものは、日月星辰、草木鳥獸等の自然物である。これは多く原始的な宗教に於ける信仰的對象である。

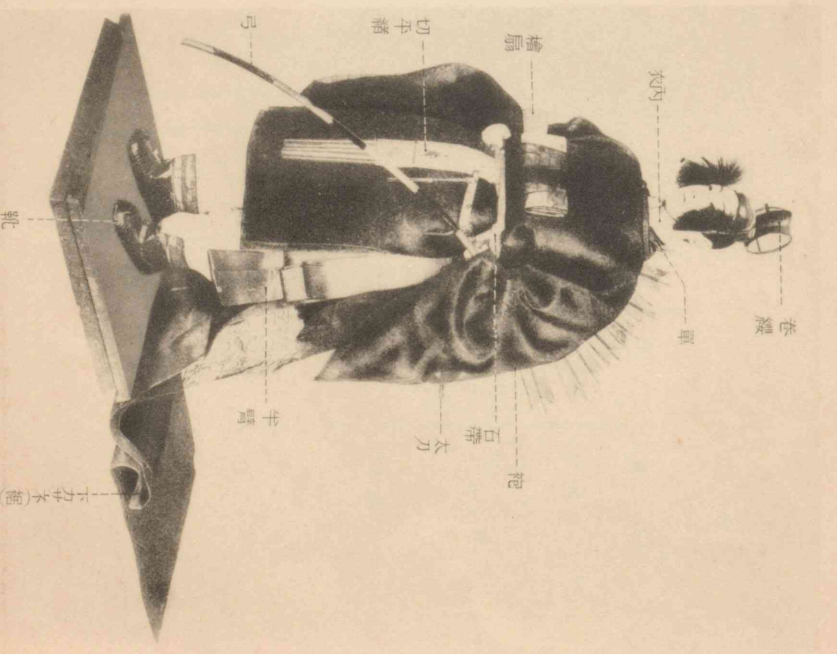
次に宗教的對象の一典型として擧げられるものは、キリスト教のゴットの如く、人間即ち宗教的主體以外に存在するものである。これに對する他の宗教的對象の一典型は、佛教の涅槃の如く、人間の内部に主觀的に存在してゐるものである。これは自己以外に存在するものではないから、主觀の精進によつて獲得する外はないので、單に福音を信じ、その存在を信じさへすればいいといふキリスト教のゴットとは、内面的に相違してゐる。

以上三種の對象は、いづれも人間以上の強さと大きさをもつものとせられ、超自然的な世界を支配する力と稱せられる。（世界宗教十六講）

中等國語讀本 新修二版卷八終



東裝士武代時町室



東裝官武代時安平

近古文學一覽

中等國語讀本新修二版卷八附錄

戶代		江時		桃士安代時山		代		時	
三〇〇									
明後水尾正		後陽成		正親町		後奈良		後柏原	
		秀吉		信長		義輝		義晴	
								義澄	
								義尙	
						藤原惲高			
						細川幽齋			
						松永貞德			
		山西宗因							
		中江藤樹							
						里村紹巴			
								義經記	
				【御伽草紙】				【連歌】	
								【俳諧】	
						大菟玖波集(三五)			

桃士安代時山		代時町室				代時野吉・興中武建					代時倉鎌												代時安平							
三〇〇		二〇〇				一〇〇〇					一九〇〇												紀元							
後陽成	正親町	後奈良	後柏原	後土御門	後花園	稱光	後小松	後龜山	長慶	後村上	後醍醐	花園	後二條	後伏見	伏見	後宇多	龜山	後深草	後嵯峨	四條	後堀河	仲恭	順德	土御門	後鳥羽	安徳	高倉	六條	二條	天皇
秀吉	信長	義輝	義晴	義隆	義隆	義隆	義隆	義隆	義隆	義隆	守時	高時	師時	貞時	時宗	長時	時賴	泰時	義時	實朝	賴家	賴朝							武家	
高惺原藤		齋幽川細				良兼條一					好兼田吉												成俊原藤							
德貞永松		隆實四條三				灌道田太					房親島北												然明長							
因宗山西		巴紹村里				祇宗尾飯					相爲原藤												隆家原藤							
藤江中						崎山					王親良宗												家定原藤							
						柏肯					阿頼												家親							
						世觀					基良條二												行西							
【御伽草紙】		犬苑玖波集(三四)				會我物語					十六夜日記												行光源							
		義經記				太平記					源平盛衰記												水丈記							
		【連歌】				新葉集(1081)					東關紀行												方丈記							
		【俳諧】				風皇正統記					古今著聞集(九三四)												新古今和歌集(八六五)							
						徒然草					宇治拾遺物語												金枕和歌集							
						神皇正統記					宇治拾遺物語												平治物語							
						新葉集(1081)					十六夜日記												平家物語							
						太平記					增玉葉集(九七二)																			
						新葉集(1081)					宇治拾遺物語																			
						風皇正統記					宇治拾遺物語																			
						徒然草					宇治拾遺物語																			
						神皇正統記					宇治拾遺物語																			
						新葉集(1081)					宇治拾遺物語																			
						太平記					增玉葉集(九七二)																			
						新葉集(1081)					宇治拾遺物語																			
						風皇正統記					宇治拾遺物語																			
						徒然草					宇治拾遺物語																			
						神皇正統記					宇治拾遺物語																			
						新葉集(1081)					宇治拾遺物語																			
						太平記					增玉葉集(九七二)																			

戶代		江時		桃士安代時山		代時										代時										代時安平					
						二〇〇〇										二〇〇〇															
明後水尾	後陽成	正親町	後奈良	後柏原	後土御門	後花園	稱光	後小松	後龜山	長慶	後村上	後醍醐	花園	後二條	後伏見	後宇多	龜山	後深草	後嵯峨	四條	後堀河	仲恭	順德	土御門	後鳥羽	安德	高倉	六條	二條		
		秀吉	信長	義輝	義晴	義種	義澄	義尙	義政	義教	義持	義滿	義詮	尊氏	守時	高時	師時	貞時	時宗	長時	時賴	泰時	義時	實朝	賴家	賴朝					
				藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
				高惺原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
				德貞永松	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
				因宗山西	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
				一樹藤江中	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
					巴紹村里	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	
						義經記	會我物語	【狂言】	【謠曲】	太平記	新葉集(1081)	風雅集(1108)	徒然草	神皇正統記	增玉葉集(973)	源平盛衰記	東關紀行	古今著聞集(914)	宇治拾遺物語	十六夜日記	平家物語	保元物語	金槐和歌集	新古今和歌集(1052)	方丈記	水鏡					

張古文學一覽

中等國語讀本(新修二版)

冊次	天	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇	皇
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500	1500

昭和四年十月五日
昭和四年十月八日
昭和五年十月四日

印刷發行
訂正印刷
訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

印刷者

發行者

編者

株式會社

明治書院

電話神田(25) 二一四七番(3)

東京市神田區三崎町三丁目十二番地
細谷祐三

取締役社長 三樹退三

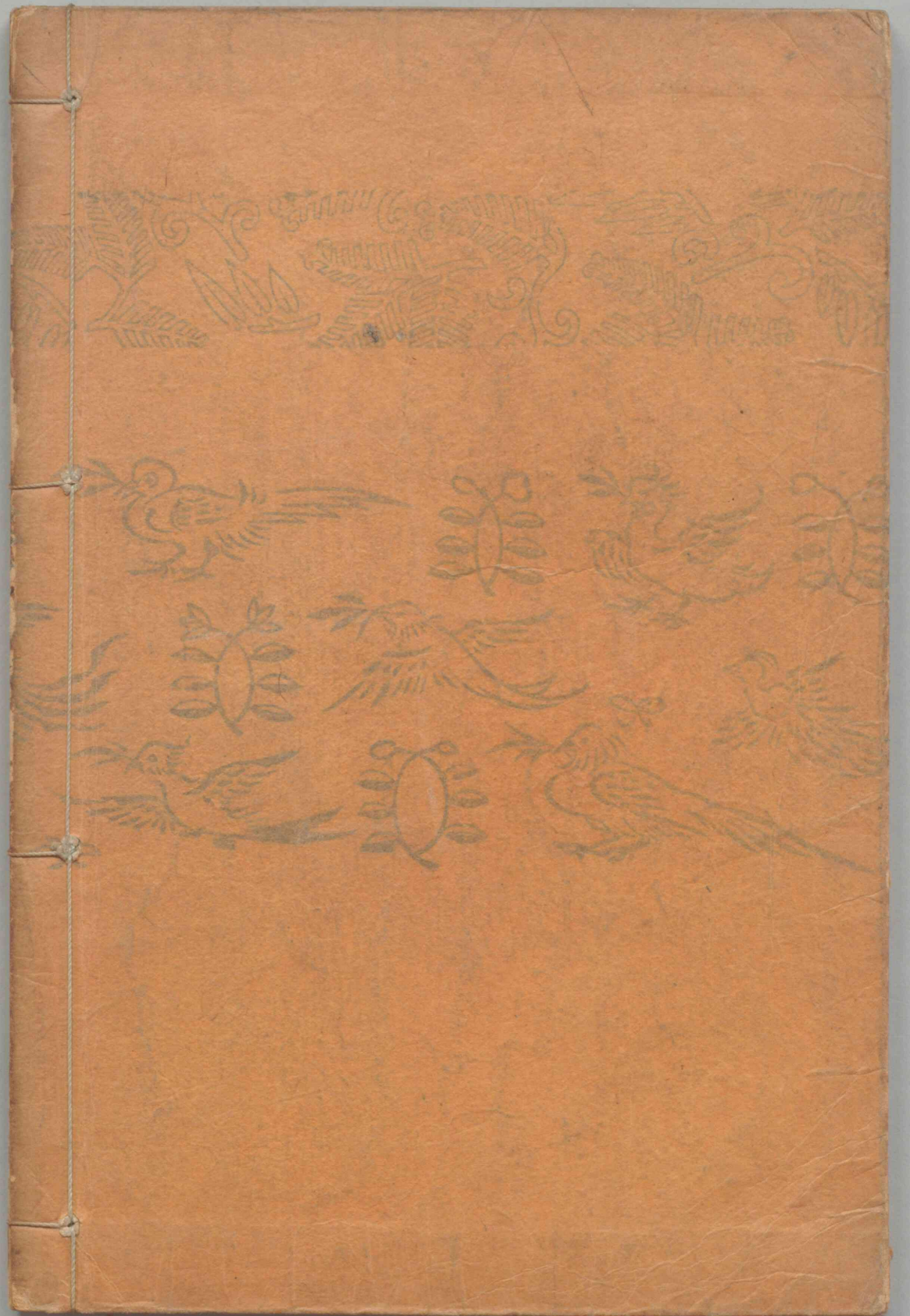
東京市神田區錦町一丁目十番地

落合直文
金子元臣

定價

自卷一 至卷四 各金六拾四錢
自卷五 至卷六 各金六拾錢
自卷七 至卷十 各金六拾壹錢

中等國語讀本(新修二版)



一はかき世の中は蕩華につけて様々であるが時や機会にあはまいで
には~~不~~けなくよいさは~~興~~事とてあつてもどうして満足を~~知~~る事
下もとま(す)す~~られ~~てあること 百ありかぞこをたす

二昔々天子が御代の政治迄をえられ民のうれひや口のそまれることも知
りすす~~て~~事~~に~~美~~を~~用~~して~~興~~ち~~ことと思ひ~~比~~躬屈ま~~様~~子を
してゐる人は甚だ思慮なげに見え~~よ~~い~~こと~~を~~あ~~る~~こと~~

三時は~~暮~~々々~~の~~はじめのほまうない~~た~~て~~て~~あ~~る~~から降~~つ~~たら降~~ら~~な~~か~~つ
たりして~~晴~~雨も絶えず~~い~~は~~し~~

嵐に吹さらばたれた木の~~葉~~末さ(涙と夫に乱れ~~な~~ら~~つ~~てあ~~る~~から
事~~に~~ふれて心けそく~~葉~~しいか